望月町文化財調査報告書　第９集

真光寺第１号古墳

――蓼科山北麓における後期古墳の調査――

1983・3

望 月 町 教 育 委 員 会

序

望月町は、ここ数年来急激に開発事業が増大してきており、これらに伴い埋蔵文化財発掘調査の件数も当然のことながら増加してきています。しかしながら本調査の場合、個人住宅の建設に伴う事前調査であり、当町におきましては未だかつて例のない調査原因でありました。本文中にも記述されていますが、地上に存在し、日頃地域の人々や私どもの目に触れていたものだからこそ個人の事業であっても事前に調査が可能であったものと思われます。これが、一般的な遺跡のように、地下に埋没しており地域の人々の関心が薄ければ、確実に破壊の一途をたどったにちがいありません。文化財保護の難しさの一端をのぞかせた調査だったといえます。

望月町には、真光寺古墳群をはじめとし、山の神古墳群、大塚古墳群、尾崎古墳群、金塚古墳群、柳沢古墳群、大林古墳群など多数の古墳群や古墳が存在しており、その大部分が盗掘や、天井石などの石材の持ち出し、あるいは開墾、道路建設等で破壊されています。そのような状況の中で正式に調査を実施したのは、昭和55年の大塚第1号･2号古墳と尾崎第4号古墳でした。すでに破壊され痕跡もないような古墳でしたが、現状でできうる限りの記録保存を行っています。これらに比較すると真光寺第１号古墳は、一部破壊を受けていたとはいうもののかなり良好な状態で保存されており、学術的に貴重な成果を得ることができましたし、十数体の被葬者の遺骸が、副飾品と伴にそのまま発見されたことにより、私たちの先人の重々しい足跡を真のあたりに見た思いがしています。

この調査により、郷土の歴史、地域の歴史が刻一刻とその全容を私たちの前に現わす日が近いことを感じ、また、本調査の成果を永く後世に伝えていく重責を痛感するものであります。

山ふところ深い蓼科山を背景に、千数百年の静寂さを保って来た古墳はもう存在していませんが、本書が記録保存の役目を荷って、遺産として広く社会に活用されるとともに、文化財愛護と文化の芽を大きく育ててゆく所存であります。

最後になりましたが、指導・助言をして下さった顧問の森嶋稔先生、また、渡辺重義氏、佐藤敏氏をはじめとする調査員の皆様、出土人骨の整理及び分析をして下さった西沢寿晃先生には、遠方から本調査のためにおいでいただき、多大なる御尽力をいただきました。さらに、調査に携って下さった作業員の皆様、調査を支えて下さった方々、本書発行に力添え下さった近藤尚義君には、熱意あふれる御協力をいただきました。ここに記して、敬意と感謝の意を表するものであります。

昭和58年３月20日

望月町教育委員会

教育長　佐　藤　初　雄

例　言

1．本書は、昭和57年４月、個人住宅地の造成及び住宅建設のため、施主である上野松治氏の要請を受け、望月町教育委員会が発掘調査を実施した調査報告書である。

2．遺構の実測は、福島邦男が行ない、吉沢浩矣、福島茂子、飯島久子にその補助を賜った。

3．写真撮影は、遺構・遺物とも福島邦男が行ない、遺物写真は近藤尚義にその補助を賜った。また、人骨の写真は、西沢寿晃の指導により、西沢寿晃・福島邦男が行なった。

4．遺物の洗浄は平林さだが、注記は福島茂子と近藤尚義が行なった。

5．遺物の復元及び実測は近藤尚義が行なった。

6．図版トレースは、近藤尚義と福島邦男が、図版作成は福島邦男が行なった。

7．本文の執筆は次のとおりである。

第１章　福島邦男

第２章　福島邦男

第３章　福島邦男

第４章　福島邦男　　第３節　西沢寿晃

第５章　森嶋　稔

8．遺物及び諸記録は、望月町教育委員会が保管している。

9．本書の作成業務は、望月町教育委員会が行なった。

目　次

序
例言
第１章　調査の動機と経過…… 1
第１節　調査の動機…… 1
第２節　調査団組織…… 2
第３節　調査日誌…… 2
第２章　真光寺第１号古墳周辺の地理的及び歴史的環境…… 5
第１節　地理的及び歴史的環境…… 5
第３章　古墳の構造…… 7
第１節　墳　丘…… 9
第２節　石　室……11
第３節　前庭部……14
第４章　出土遺物……15
第１節　遺物の出土状態……15
第２節　土　器……16
第３節　武器及び装身具……19
第４節　真光寺第１号古墳出土人骨……21
第５章　総括・(結語)……29

挿図目次

第１図　真光寺第１号古墳位置図及び周辺遺跡分布図(1：10000)…… 6
第２図　真光寺第１号古墳墳丘実測図(1：120)…… 8
第３図　真光寺第１号古墳石室墳丘断面図(１：80)……10
第４図　真光寺第１号古墳石室及び前庭部実測図(１：80)……12
第５図　真光寺第１号古墳石室構築及び追葬状態(１：60)……13
第６図　真光寺第１号古墳出土遺物(１：３)……17
第７図　真光寺第１号古墳出土遺物(１：３)……18
第８図　真光寺第１号古墳出土遺物(１：２)……20
第９図　真光寺第１号古墳出土人骨部位……26

表目次

第１表　真光寺第１号古墳周辺の遺跡分布表…… 7

図版目次

第一図版　１．真光寺第１号古墳墳丘全景。２．真光寺第１号古墳墳丘・石室・前庭部全景。

第二図版　３．真光寺第１号古墳墳丘・石室・前庭部全景（落下天井石を取り除く）。４．第Ⅰ期床面。５．第Ⅱ期床面。

第三図版　６．第Ⅰ期石室の様子（框石は第Ⅱ期のもの）。７．第Ⅱ期玄室内の様子。

第四図版　８．閉塞石の様子。９．閉塞石の様子。

第五図版　10．墳丘西部Ｃ－Ｄ断面。11．墳丘東部Ｃ－Ｄ断面

第六図版　12．墳丘北部Ａ－Ｂ断面（奥壁裏側）。13．玄室内人骨出土状態（右側が第１群、左側が第２群）

第七図版　14．第１群人骨出土状態。15．第２群人骨出土状態。

第八図版　16．真光寺第１号古墳出土土器。

第九図版　17．直刀出土状態。18．刀子出土状態。19．刀子出土状態。20．刀子出土状態。21．金環出土状態。22．金環出土状態。23．銀環出土状態

第十図版　24．真光寺第１号古墳出土武器及び装飾品。

第十一図版　25．地元の方々の見学会風景。26．協和小学校生徒さんの現地学習。

第１章　調査の動機と経過

第１節　調査の動機

望月町における埋蔵文化財発掘調査は、本年度ピークを迎えたと言ってよく、その数は合計８遺跡であった。その多くは、公共事業に伴う発掘調査であったが、真光寺第１号古墳発掘調査だけは、当町においても今までに例のない個人住宅地の造成と建設が原因で実施したものである。

調査の原因者である上野松治氏から望月町教育委員会に対し、宅地造成で古墳を破壊する旨の連絡が昭和56年12月にあり、ただちに長野県教育委員会文化課に連絡を行なった。12月５日には、上野松治氏立ち合いのもと、望月町教育委員会による現地視察を行ない、保存の必要性と、調査を行なう場合の内容について話し合いを行なう。12月10日、予定通り宅地造成を行ないたいとの連絡があり、やむなく発掘調査実施の方針で対処することになった。同日、長野県教育委員会に対し、これまでの経過を連絡するとともに、補助対象事業として実施できるよう予算措置のお願いをする。12月11日、長野県教育委員会へ、望月町教育委員会佐藤初雄教育長と大森睦男社会教育係長が出向き、経過報告と真光寺第１号古墳の概要資料を提出し、補助事業で実施できるよう依頼する。すでにこの段階では補助事業計画書の提出が終了していた時期でもあったが、好意的に働きかけを受け入れてくれた。昭和57年１月７日、昭和57年度文化財関係補助事業計画書の提出を行なう。引き続き3月24日には、埋蔵文化財包蔵地真光寺第１号古墳発掘通知の提出を行なう。

調査は、宅地造成の時期に間に合わせるということで、急拠４月から実施せざるを得ず、また当町の古墳発掘調査は４基目であったが、中でも良好に保存されていたものであり、その重要性の認識から約１ヶ月の期間を設定し調査に入った。

先にも記述したが、個人が原因となる発掘調査は当町では初めての例であるが、地上に見えている古墳だからこそ成し得たものであり、地下に埋蔵する文化財であったなら対処するのが非常に難しかったと思われる。特に佐久地方は、朝鮮人参の栽培が栄んであり、最近では重機により耕作するのが常となってきている。当然埋蔵文化財は、影もろともである。耕作者にとっては、重機はクワやスキと同じなのである。このような現状の中でいかに保護対策を行なっていくかは大変大きな問題である。また個人住宅の建設においても多大な問題を含んでいる。

本調査は、土地所有者の生活権と埋蔵文化財保護対策が大きく表面化したものといえ、これらは、限定されたある一地域のあり方としてではなく、県内全般にわたる問題としてその取り組みが成されるべきであると考える。

第２節　調査団組織

顧　　問　森嶋　稔（日本考古学協会々員・千曲川水系古代文化研究所主幹）
特別指導　西沢寿晃（日本考古学協会々員・信州大学医学部第二解剖学教室）
調査団長　福島邦男（日本考古学協会々員・望月町教育委員会学芸員）
調 査 員　渡辺重義（長野県考古学会々員・軽井沢町文化財専門委員）
　　佐藤　敏（長野県考古学会々員・佐久考古学会々員）
　　黒岩忠男（長野県考古学会々員・佐久考古学会副会長）
　　三石延雄（長野県考古学会々員・佐久考古学会々員）
作 業 員　桜井卯作、倉見渡、関嘉津武、吉沢浩矣、吉沢弥太郎、大森英七、福島茂子、飯島久子、日暮信生、永井健蔵、今井伊一、大森一尾、土屋重雄、清水七五三子。
調査事務　（社会教育係）大森睦男（係長）、高橋重雄、上野早苗、花岡一子、小林辰男、福島邦男。
見 学 者　大沢洋三、鈴木高、桑沢俊雄、柳沢右三郎（以上文化財調査委員）、新津開三、矢島宏雄、森山公一、佐藤信之、原田政信、高呂地区住民120名、協和小学校生徒50名、本牧小学校歴史クラブ５名。

第３節　調査日誌

４月５日（月）晴れ

本日より真光寺第１号古墳緊急発掘調査を開始する。午前中に器材の搬入を終え、結団式を実施する。午後から、東－西、南－北にトレンチを設定し、葺石を剝ぎ始める。

４月６日（火）晴れ

天井石、玄室、羨道の位置及び方向などが大方把握できたため、細部調査に入る。玄室の掘り入みを進めるとともに、後世に墳丘に投げ上げた石の取り除き作業も行なう。

４月７日（水）雨のち曇り

墳丘上に投げ上げた石はかなり厚く、また、墳丘周囲に耕作で出た石を石垣状に積み上げてあるため、その取り除きに苦労する。玄室の掘り込みでは側壁、奥壁がかなりの部分まで露呈し、２体分の頭蓋骨が出土する。また、土師器と須恵器の小片が覆土中より出土する。

４月８日（木）雨のち曇り

昨夜来の雨は、午前中まで降り続いた。墳丘をシートで覆い、その中で玄室掘り込みの作業を行なう。頭蓋骨はすでに６体分となり、他に直刀、刀子が出土する。羨道部の掘り込みを開始する。閉塞石が露呈し、全容の把握に勤める。

４月９日（金）曇り

後世に積み上げられた石の取り除きが進む、玄室の清掃に取りかかる。側壁は小口積みと横積みで構築されている。閉塞石の全容がほぼ明らかになる。

４月10日（土）晴れ

墳丘の清掃を開始する。玄室及び閉塞の清掃も開始する。信州大学医学部第二解剖学教室西沢寿晃先生に玄室内より出土した人骨の現地調査を実施していただく。

４月11日（日）晴れ

本日作業休み

４月12日（月）晴れ

墳丘及び石室の清掃と写真撮影を行なう。また、閉塞の清掃、墳丘の十字トレンチを掘り始める。

４月13日（火）曇り時々雨

墳丘の断ち割りと周溝の検出作業を行なう。細部の写真撮影のため閉塞石及び羨道の清掃を行なう。閉塞は、あまり破壊されていないことがわかる。

４月14日（水）曇り時々雨

昨日に続き閉塞石と羨道、さらに玄室の清掃を行なう。墳丘トレンチを新たに２本設定し、掘り始める。トレンチ内より須恵器の坏及び甕形土器の破片が出土する。

４月15日（木）雨

本日は一日中雨降りであったが、石室を覆ったシートの中で清掃作業を行なった。

４月16日（金）晴れ

昨日に続き清掃作業を行なう。

４月17日（土）曇り

内部主体の実測のため、水糸張りや割り付けを行なう。墳丘トレンチ掘りが続けられる。

４月18日（日）晴れ

石室及び出土遺物の実測を行ない、人骨などの取り上げ作業を行なう。人骨はかなり整っているようであるがもろさが目立つ。直刀、金環などは極めて保存状態が良い。

４月19日（月）晴れ

閉塞石の平面図及び断面図の作成を行ない、閉塞石を取り除く。改めてこの付近の清掃を行なう。墳丘トレンチ掘りはほぼ終了する。横瓶や甕形土器などが出土する。

４月20日（火）晴れ

閉塞石を取り除いた状態の写真撮影を行ない、床石の撤去とその下部の精査に取りかかる。その結果、再び扁平の河原石を敷き詰めた床が検出され、早速清掃に取りかかる。

４月21日（水）晴れ

床面の清掃、写真撮影、実測を行ない床石の取り除きを行なう、清掃中金環、銀環、刀子が出土する。協和小学校高学年と本牧小学校歴史班が見学に来る。

４月22日（木）晴れ

玄室床石の取り除きを行ない、排水溝検出のための精査に入る。下部は、八丁地川の河岸段丘

上であるため砂礫が堆積しており、比較的軟弱であるため検出は大変難しい。

4月23日（金）晴れ

石室床石下部の精査を続ける、依然として排水溝の検出はできない。墳丘のA－B、C－Dトレンチの土層分けと断面実測を行なう。

4月24日（土）晴れ

石室下部には排水溝が無い（砂礫層のため不必要）ことがわかった。断面実測を続ける。

4月25日（日）晴れ

本日は作業休み。

4月26日（月）晴れ

玄室、羨道、前庭部の断面実測及び前庭部の平面実測を行なう。

4月27日（火）晴れ

墳丘や石室などの図面の再確認のため、部分的に平板等を据え点検する。墳丘トレンチの一部埋め戻しを行なう。

4月28日（水）晴れ

昨日に続きトレンチの埋め戻しを行ない現場調査を完了した。

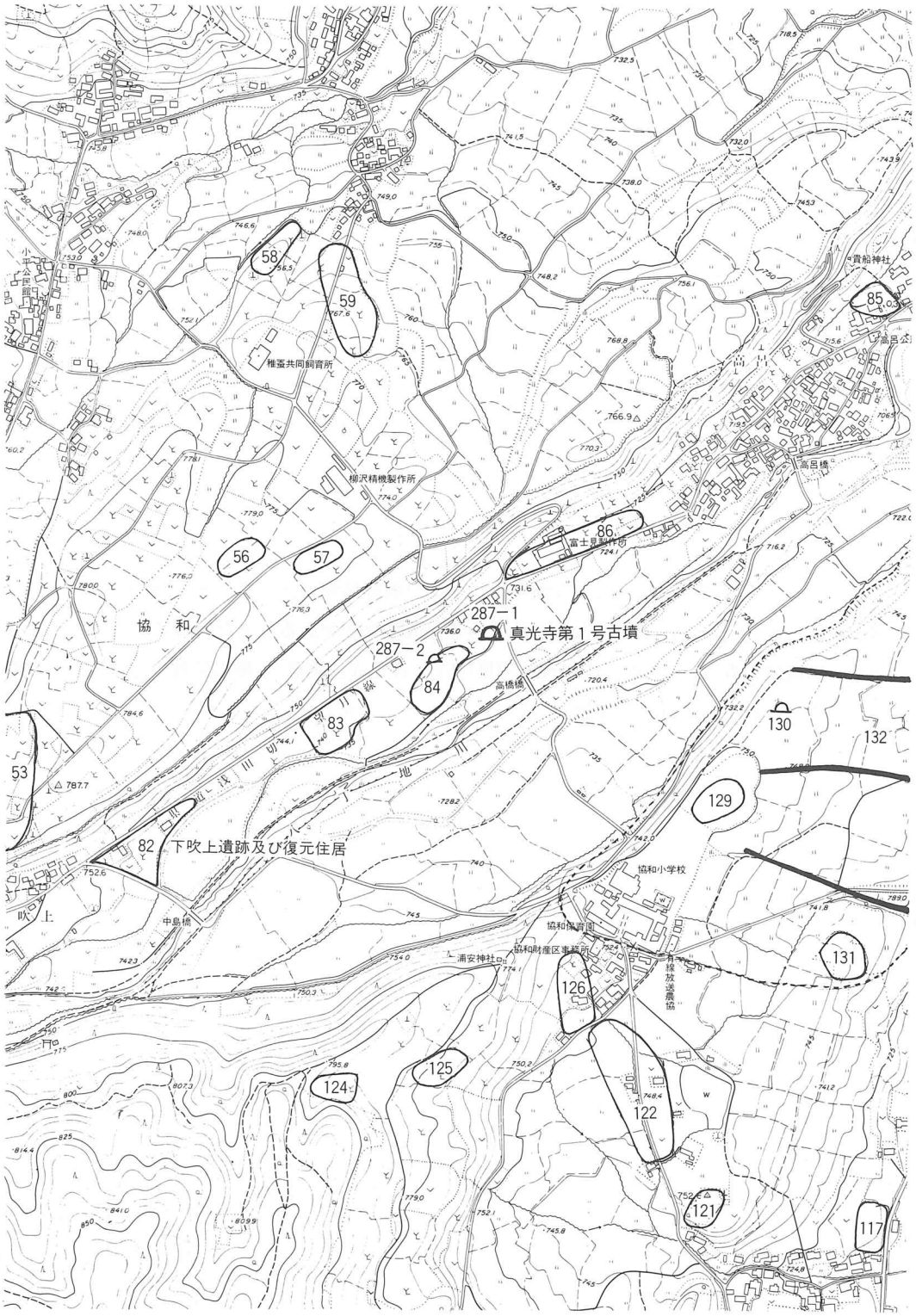
第2章　真光寺第1号古墳の地理的及び歴史的環境

第1節　地理的及び歴史的環境

真光寺第1号古墳は、蓼科山を源とする八丁地川の左岸河岸段丘上に位置しており、すぐ北側には、望月と寺久保を結ぶ県道浅田切・望月線が走っている。この付近は、鹿曲川との合流地点より上流1800m程の所にあり、八丁地川水系からすれば下流域に当たる。上流は、蓼科火山の裾野を抜って本流となり、かなり深くそして狭い渓谷状地形の中を流下しており、したがって、本流による平坦部や河岸段丘があまり発達していない。ようやく大谷地付近に至って平坦部が開け河岸段丘の形成をみることができる。大谷地より合流地点までは、狭いながらも河岸段丘をより発達させており、これに伴い遺跡数の増加が目立ってくる。

八丁地川水系の中流、上流においては、平安時代の遺跡が圧倒的に多く、僅かに縄文前期・中期の遺跡が伴うという分布状況をみせているのに対し、下流の大谷地付近からは、平安時代の遺跡はやはり多いものの、規模の大きな縄文時代中期の集落址が目立ってくる。例えば、平石遺跡、下吹上遺跡(註1)(第1表・82)、大塚遺跡、極楽寺遺跡などがある。また同様に、古墳(群)も大谷地から下流域に存在している。山の神古墳群(註2)、真光寺古墳群、大塚古墳群(註3)、尾崎古墳群(註4)などがそれで、それぞれ小範囲に小規模なまとまり方をみせている。これらの河岸段丘上の遺跡に対して、八丁地川水系を臨む台地ないしは高台に立地する遺跡がある。その代表的なものは、縄文時代中期末葉の貴船反遺跡と当町では最も古いと考えられる内裏塚第1号古墳・同2古墳である。貴船反遺跡は左岸の台地に位置しており、下吹上遺跡とかなり関連が深いと考えられる。内裏塚第1号、2号古墳は、貴船反遺跡のほぼ対岸の山頂に位置しており、八丁地川水系のみならず広範な地域を臨むことができる。さらに時代は下るが、八丁地川と鹿曲川を利用し、また両者の合流地点を利用し、天神城跡が存在している。昭和58年度に一部発掘調査を実施する予定であり、その結果に期待するところ大なるものがある。

真光寺古墳群の「真光寺」とは、本地域の字名である。かつて寺が建立されていたことは明らかで、僧侶や尼僧の墓標などが現在も数多く残されている。寺領は、本古墳をほぼ東限とし、県道浅田切・望月線に沿って西へ約100m、県道から八丁地川に向って70～80mの範囲であると考えられ、八丁地川の第1河岸段丘と第2河岸段丘を南向きに利用していたものと思われる。ここには三方を石積みにし、南側を開口させた長方形の規模の大きな区画が幾つも存在しており、真光寺とかかわりをもつものであるかは不明であるが、特殊な遺構として注目する必要があると思われる。真光寺は江戸時代の建立は明らかで、望月町大字協和小平にある福王寺（真言宗）を本寺とし、その末寺であった。明治維新政府による廃仏棄釈により、福王寺に吸収され廃寺となっている(註5)。現在この付近一帯は畑地となり、また、住宅も立ち並びつつある。



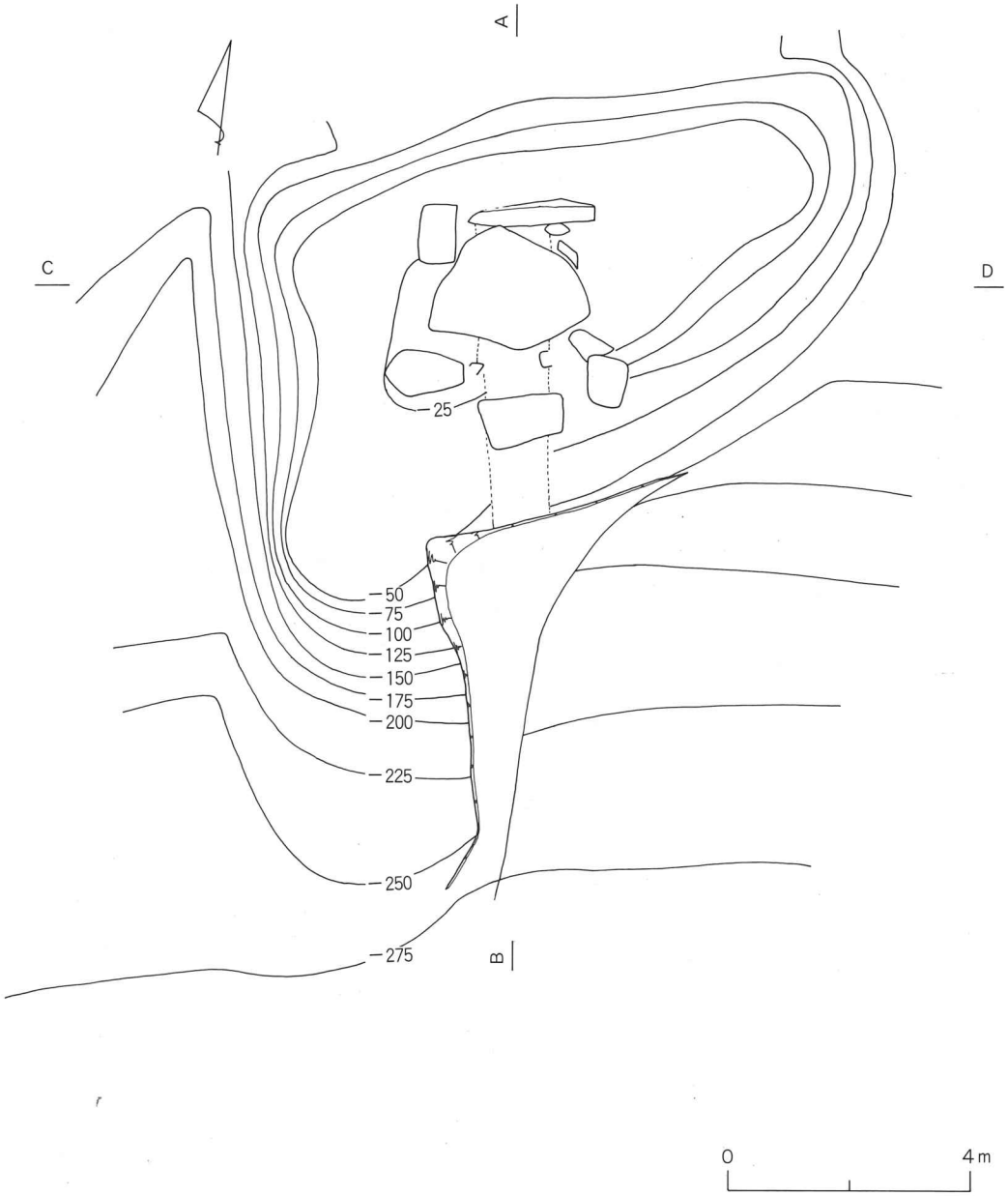
第１図　真光寺第１号古墳位置図及び周辺遺跡分布図（１：10,000）

町遺跡番号	遺跡名	大字	小字	町遺跡番号	遺跡名	大字	小字
53	貴船反遺跡	協和	貴船反	121	十二平A遺跡	協和	十二平
56	北上遺跡	〃	北上	122	十二平B遺跡	〃	〃
57	竹の花遺跡	〃	竹の花	124	堂上日影A遺跡	〃	堂上日影
58	下林A遺跡	〃	下林	125	堂上日影B遺跡	〃	〃
59	下林B遺跡	〃	〃	126	協和金山遺跡	〃	金山
82	下吹上遺跡	〃	下吹上	129	城口遺跡	〃	城口
83	下吹上下遺跡	〃	〃	130	青柳塚古墳	〃	青柳
84	真光寺遺跡	〃	真光寺	131	下天神反遺跡	〃	下天神反
85	高呂遺跡	〃	高呂	132	天神城跡	〃	尾崎・本城・塚田・青柳・下城口・上城口・堂上日影
86	馬場遺跡	〃	馬場	**287－1**	**真光寺第1号古墳**	〃	**真光寺**
117	蓑の田遺跡	〃	蓑の田	287－2	真光寺第2号古墳	〃	〃

第1表　真光寺第1号古墳周辺の遺跡分布表
（望月町遺跡詳細分布調査報告書より）（註6）

第3章　古墳の構造

真光寺古墳群は、第1号古墳を含め確実に把握できるものは2基だけである。しかし、破壊された古墳の石が散乱している箇所や、ヤツクラ状になっているもので古墳と考えてよさそうなものも含めると、合計8基（箇所）程が認められる。このうち第2号古墳は、第1号古墳よりも規模が大きく、また保存状態も良好であり、第2河岸段丘の淵に位置しており、他の7基は全て第1河岸段丘のやや引き込もった所に位置している。



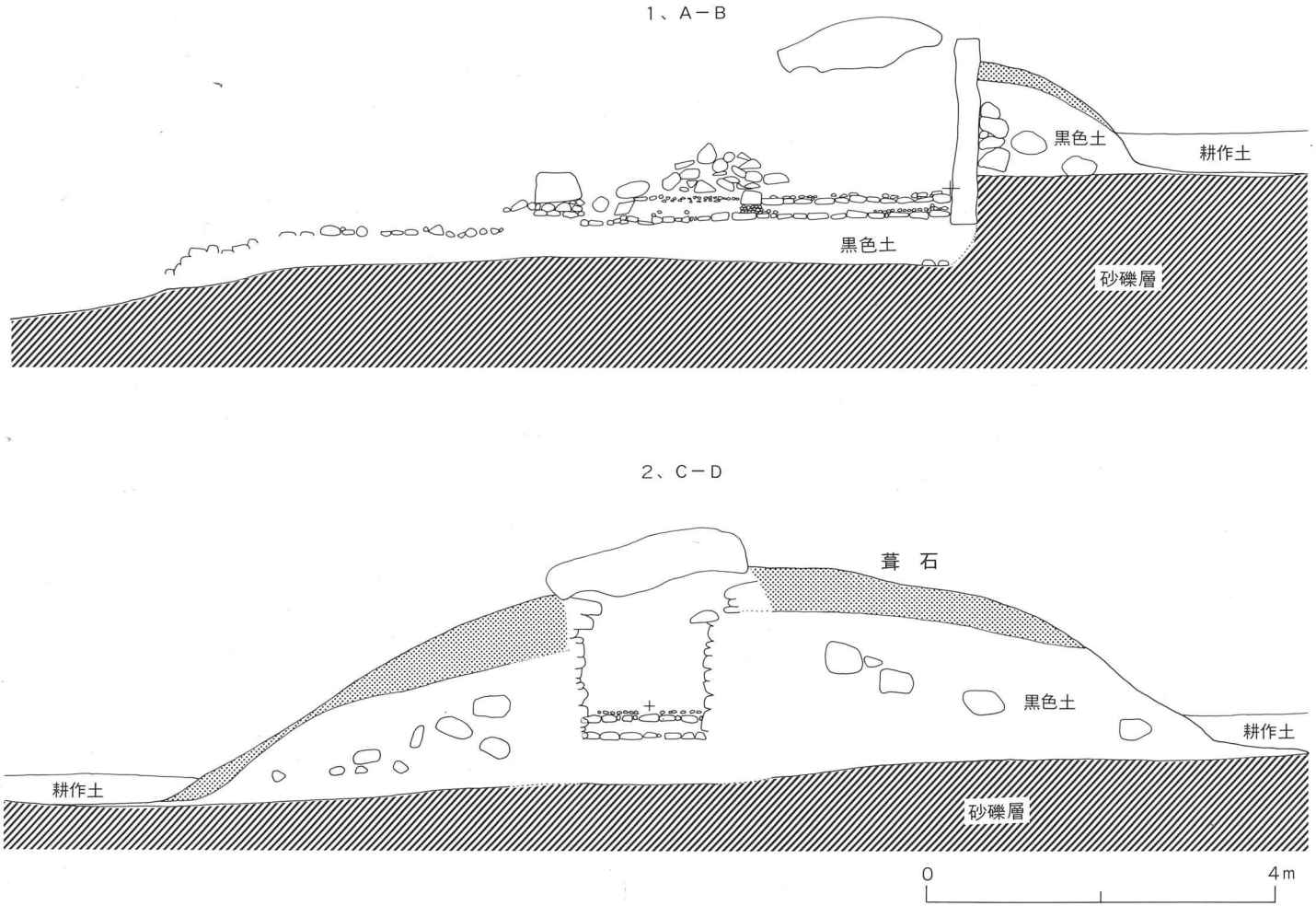
第2図　真光寺第1号古墳墳丘実測図（1：120）

第1節　墳　丘

本古墳は、畑の中に独立して位置していたが、近年住宅が幾棟か建設され、その裏手のような環境となっていたため余り目立たないものの１つであった。調査は、墳丘上にはびこるホンウルシの大木やアケビなどの雑木の伐採から開始された。現状では、東西11.6ｍ、南北11.8ｍ、高さ2.75ｍを図り、実測図（第２図）でも明らかのように、周囲が耕作によりかなり削り取られてしまっていた。中でも南東部分は、前庭部の半分以上を破壊し羨門部分にまで達していた。また、西側と北側部分は、さながら切り立つように削り取られ、奥壁まで僅か１ｍ前後というところまで達していた。削平後は周囲に石垣状の石積みをし、崩れを防いであった。天井石は、調査前からすでに墳丘から浮き上ったように露呈し、同様露呈していた奥壁の上部から天井石を引き出そうとしたらしく、ズレが認められ、僅かな部分で支えていた。墳丘上の石は、工事に利用されたことがあり、天井石周辺部から南側に向って作業の痕跡が認められる。特に南西部の張り出し部において顕著である。第２図の墳丘実測図は、後世における周囲の石垣や墳丘に投げ上げられた礫等を取り除いた後のものであり、できうる限りの現状把握である。

墳丘の構築状態は、主体部の主軸方向にＡ－Ｂトレンチ、主体部の断面ポイントＥ－Ｆに合わせ、主軸に直交させてＥ－Ｆトレンチを基本的に設定した。さらに確認の意味で主体部を貫く２本のトレンチを設定（図なし）した。墳丘構造は、第３図の通り基盤である砂礫層上に黒色土を積み、主体部構築の後再び控積みをしながら黒色土で土盛りを行ない、最後に河原の小礫で全体を覆っている。砂礫層は、八丁地川の堆積層であり本地形の形成層である。第３図１の奥壁直下の基盤は１ｍ程の段差が認められるが、この付近は、第１・２河岸段丘の段丘線に当っており、その段差を利用し、手を加えることによって奥壁部を構築したのではないかと思われる。黒色土は、かなりの土量におよんでいるが、墳丘の原形を把握するには重要な役割りを果してくれた。第３図1･2をみると、地山直上に黒色土が存在し、しかも黒色土の上に耕作土が乗っている。恐らくこの部分の耕作土は、墳丘の黒色土を削平したものと思われ、墳丘の一部も耕地化されてしまった結果であると思われる。したがって、黒色土の末端部が調査によって把握できる墳丘の原形であると考える。この部分での測定値は、東西15ｍ、南北14ｍ、この値から推察すれば高さ3.5～4.0ｍにもなる。

墳丘黒色土中には、周囲を巡る４段の控積みがあり、かなり大きな河原石を墳丘の裾からほぼ等間隔に巡らしている。但し、この控積みは、墳丘そのものを段状に構築するための縁石ないしはそのための土留めではなく、さらに黒色土を盛り葺石をしているところから、あくまでも封土そのものの土留めであると考える。葺石は、現存部の最大厚で70㎝を測り、小礫から拳大の礫を配してある。墳丘の裾の部分は、耕作により封土ともども取り除かれてしまっている。本来葺石で天井石も覆ってたことを考えれば、厚さは1.5ｍ以上もあったことになる。地山から盛った黒色



第３図　真光寺第１号古墳墳丘及び石室断面図（１：80）

土の封土が約1.5ｍ、葺石が1.5ｍで、墳丘の半分は石積みである。積石塚古墳としての問題もここで出てくると思われるが、後章にゆづることにする。

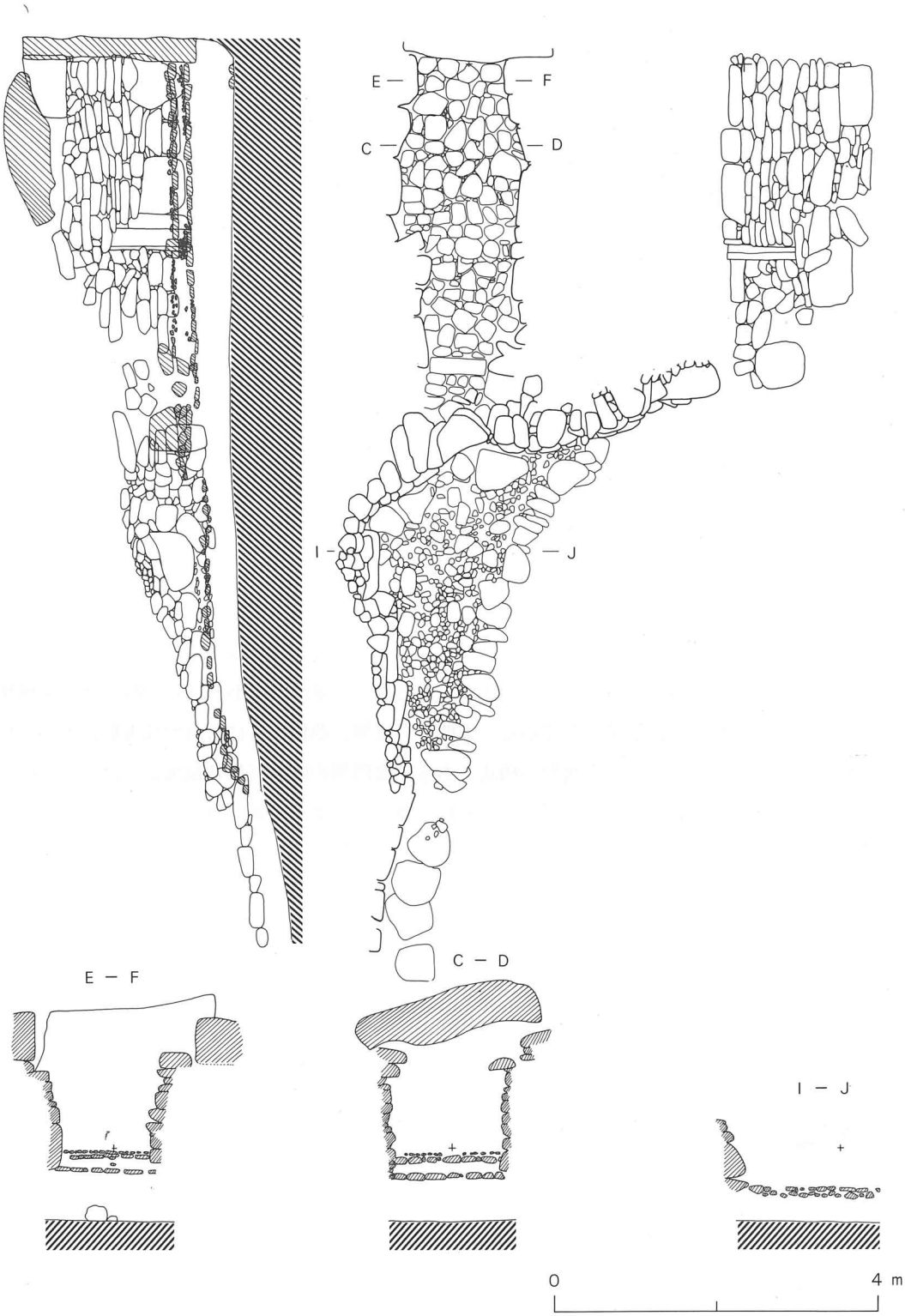
第2節　石　室

本古墳の石室は、先にも記したように、地山の上に黒色土を盛り、その上に構築された横穴式の構造をもっている。主軸は、N6.5°Wで、奥壁から羨門部までは4.5ｍを測る。また、古墳では特異な前庭部の造出しを有し、羨門部からの主軸延長で4.5ｍを測る。

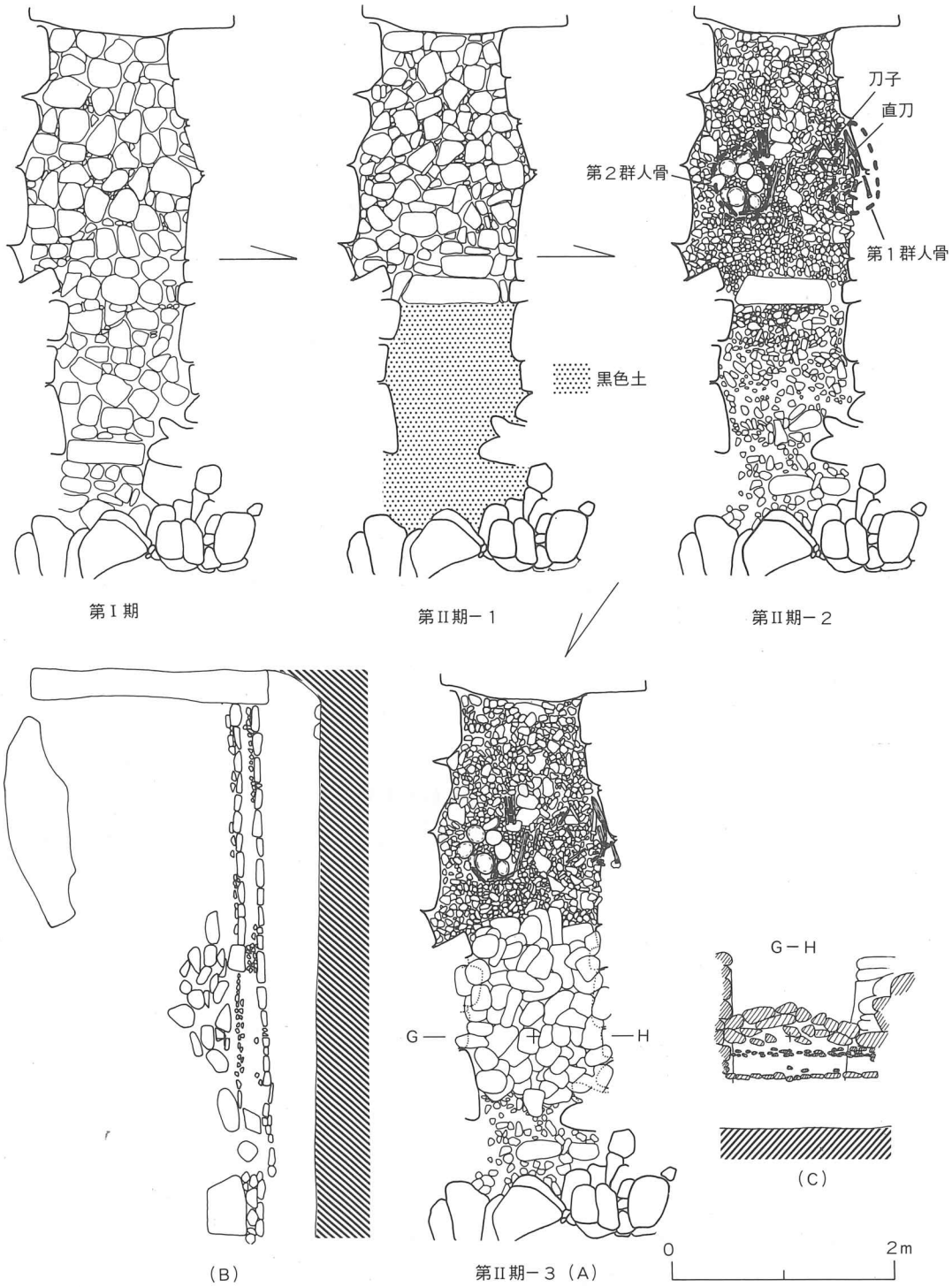
まず玄室は、奥壁から玄門まで2.3ｍ、側壁間の長さで最狭である奥壁手前で1.05ｍ、ほぼ中央部の最大幅で1.7ｍ、玄門部手前で1.5ｍ、玄門間で1.1ｍを測る、平面形態はかなりの胴張りであるが奥壁手前が極めて狭いため、むしろ玄門に向って全体が開いているような感を受ける。奥壁は、玄室内で見える範囲は、巾1.1～1.5ｍ、高さ1.7ｍ程であるが、実際には、巾2.3ｍ、高さ2.15ｍ、厚さ25～30cmの巨大な1枚石を屏風状に立ててある。しかもこれは自然石ではなく、丁寧に両面にわたって加工がされている。側壁は、根石に50～70cmの石を置き、その上に比較的扁平な石を同様横積みにしている。但し、側壁最上部の一列は、小口積みで構築されているのが特徴的である。また、側壁の最上部は、東壁、西壁ともに巾20～40cm程の段が作られており、両側壁面よりも外部に平らな面を内側に向けた大きな石が対象的に置かれており(第4図Ｃ－Ｄ)、横積みの側壁に対してやや様相を異にしている。玄門は、東側、西側ともに断面が長方形に近い方柱状の石を立てており、いわゆる両袖型の構造である。玄門間の床面（第Ⅱ期床面）には、方柱状の安山岩（鉄平石）を利用し框石が置かれ、両端の隙間には礫が詰められていた。閉塞石は、玄門から羨道にかけて1.85ｍ、巾は羨道の両側壁までの間を埋めつくしていた。上部は、石が抜き取られたらしく床面から65cm程の高さであった。閉塞石の全部が、角のとれた人頭大の礫であり、八丁地川の石を利用したことが容易に想像される。

羨道は、玄門から羨門まで2.2ｍ、側壁間1ｍ～1.25ｍを測る。主軸は、玄室とほぼ同様の規模であるが、側壁間の巾がかなり狭くなっている。東側壁は、玄室の側壁から玄門を通してほぼ直線的に構築されているのに対し、西側の玄門が玄室の西側壁から内側に40cm程突き出されており、この突き出された面に合わせて羨道部の側壁が構築されている。したがって、玄門の突き出した分だけ、羨道部の幅は狭くなっているわけである。側壁の状態は、前庭部に近い程石が抜き取られていたが、玄室と同様横積みにより構築されていた。

天井石は、現存していたものは2枚で、奥壁にかけて玄室に1枚、閉塞石上部に1枚であった。玄室を覆う天井石は、2.15×2.7ｍ、厚さ65cmのやや丸味をもつ巨大な石で、後世に運び出そうとしたらしく、北東部の奥側との接点部から羨道方向にかけて移動した痕跡があり、奥壁で支えている部分はほんの僅かである。第Ⅱ期床面から天井石までの高さ1.5～1.8ｍ、第Ⅰ期の床面からは1.7～2ｍを測る。閉塞石上部の天井石は、後世による羨道部側壁石の抜き取りにより落下したと



第４図　真光寺第１号古墳石室及び前庭部実測図（１：80）



第５図　真光寺第１号古墳石室構築及び追葬状態（１：60）

思われ、閉塞石に接地する程になっており、原位置をかなり移動していた。また、後世にクサビを入れて割った痕跡が認められ、大きさもかなり縮少しているものと思われた。石室を覆うには、玄室上に残されている大きさの石で3枚は必要であり、その状況からみると存在していた他の天井石も持ち運ばれてしまったと推測される。

床面（第4図・第5図）は、第Ⅰ期のものと第Ⅱ期（追葬面）のもの二面が検出された。まず第Ⅰ期の初現の床面は、20～30cm程の角のとれた丸味のある扁平な河原石を、石室内全体にまんべんなく敷き詰めている。その空間を埋めるように小礫を詰めている。さらにその敷石上に河原の玉砂利を敷いている。玉砂利は、奥壁に近い所に集中して検出されたが、当初は全面に敷かれていたものと思われる。羨道と前庭部の間には、断面が菱形の方柱状の框石が伏せられていた。床面は、全体に北から南に向って微妙に傾斜する傾向にある。追葬面である第Ⅱ期になると、第Ⅰ期床面上に茶褐色土を5～10cmの厚さに敷き、そこに再び角のとれた扁平な河原石を敷き詰めている（第Ⅱ期－1）。但し、第Ⅰ期とは異なり玄室部だけに限られており、羨道には玉砂利のみを敷いている（第Ⅱ期－2）。玄室内の敷石は、第Ⅰ期よりもやや小さ目であり、大きさにも変化がある。敷石空間部には同様に石が詰められている。第Ⅱ期の構築状態の方が緻密さを感じる。扁平礫の敷石の後、その上面に玉砂利を全面に敷いている。また、玄門部にある框石は、第Ⅱ期の扁平礫を敷く時に設置したものであることがわかる。床面の傾斜はほぼ水平である。

第3節　前庭部

前庭部（第4図）の検出は、本古墳を特徴づける最も重要なものの1つである。羨道の入口に接し、恐らくは南側が開口する方形ないしは長方形の区画であったかと思われるが、東側の側壁と床面が破壊されてしまっていた。規模は、現状で東西3.2m、南北3.3m、側壁の高さは最大で1mを測る。また床面のレベルは、石室床面より25～30cm程低い。側壁は、かなり大きな河原石が用いられ、羨道と接する北側は小口積み、南側は横積みで変化がある。特に根石には大きな石を用いている。床面は、空白部分も僅かに目立つが、全面に扁平な玉砂利が敷かれている。石室の玉砂利に比べるとやや大き目のものである。前庭部から羨道への上り口には、階段石とも考えられる上面扁平な石が置かれている。床面の傾斜はあまりないが、南側部分に近い程やや南に傾斜している。

第４章　出土遺物

第１節　遺物の出土状態

本古墳の出土遺物は、直刀１口、刃子６口、金環３個、銀環１個、土師器の甕片２、須恵器のフラスコ形長頸壺２（１個体ほぼ完成）、甕片が出土しており、種類、数量ともにかなり少ない。出土地点は、墳丘の南西部封土中、玄室及び羨道の第Ⅰ期・第Ⅱ期床面である。これらの遺物の他に、埋葬人骨が10体分確認された。

遺物の保存状態は、墳丘出土遺物の場合、１ヶ所から集中して出土しており、各所での散乱はあまり認められないが、フラスコ形長頸壺を除いては固体になるものがなく、保存状態が余り良いとは言えない。また、天井石や羨道部の側壁石の抜き取り及び運び出しが行なわれているが、石室内に黒色土が厚く堆積しており、調査の現状からみて盗掘は考えられない。さらに、第Ⅱ期床面上の人骨が確実に原位置を保っており、特に８体分の頭蓋骨は形を整えて出土しており、盗掘等による破損の痕跡は認められない。但し、遺物の種類や数量が、当地方における古墳に比較して極めて少ないことが気がかりである。覆土に僅な側壁石と思われる石が落下し混入していたが、床面には、天井石、側壁石等の落下した様子は全くなかった。

第Ⅰ期床面遺物出土状態

石室において第Ⅰ期の床面から出土した遺物は、玄室では、刀子１口、銀環１個、羨道では、刀子１口である。いずれも床の敷石上から出土している。刀子は玄門近くの主軸より東側の、玄室内と羨道の中央よりやや南側の地点である。銀環は、奥壁よりやや南側の、主軸西側に寄った地点で出土している。なお、人骨は、骨粉が微量確認できただけであった。

第Ⅱ期床面遺物出土状態

第Ⅱ期の追葬面における出土遺物は、出土状態から玄室内を２群に分類することができる。１群は、東側壁のほぼ中央部に接し、まとめてかたつけられたように出土している遺物と人骨、２群は、玄室の中央部からやや玄門寄りで、主軸と西側壁の間に、原位置を保っていると考えられる遺物と人骨である。

１群の出土遺物は、直刀１口、刀子３口であり、また、大腿骨を中心とする人骨約２体分がある。直刀とそれぞれの人骨は、東側壁に沿って南北方向に置かれており、さながら束にして寄せてあるという状態である。確実に原位置から移動していることがわかる。刀子のうち１口は、信州大学で人骨のクリーニングの際、大腿骨の髄の中から発見されている。生前に入ったのか、あ

るいはそれ以外の状況により入ったのか非常に難しい問題であると同時に重要な問題でもある。刀子表面には、骨髄海面状組織が化石化して付着しており、海面状組織が消失する以前に入り込んだことは明らかである。人骨は、西沢寿晃氏の所見（第４章）によれば、頭蓋骨の各部位の破片、脊椎骨、肩甲骨、上腕骨、寛骨、大腿骨、脛骨などが出土し男性、女性ともに含まれているということである。

これらの出土状態から推察すると、原位置に存在する第２群に対して、第１群が明らかに移動していることを考えれば、第Ⅰ期床面に存在していた埋葬人骨や遺物を第Ⅱ期床面を構築するときに一担取り上げ、床面ができ上ったときに、再埋葬したのではないかとの推察ができる。もう一つは、第１群遺物も第Ⅱ期のものであり、第２群を埋葬するときに第１群をまとめて東壁際に寄せたという推察もできる。現状からは、これらの推察の域は出ない。

２群の出土遺物は、金環１個と人骨である。金環は、人骨の直下で床面に接して出土している。人骨は、調査段階では、頭蓋骨８体分や大腿骨などが一定範囲にまとまって出土した。その後の西沢寿晃氏の所見（第４章）によれば、頭蓋骨９体分、下顎左側の第２乳臼歯、上腕骨、大腿骨、脛骨、肩甲骨、脊椎骨、尺骨、助骨、中手骨などが明らかになっている。特に頭蓋骨と大腿骨は、もろさはあるものの形状を残し、員数を把握できる程のものであったと分析している。頭蓋骨は、第４章でも記述されている通り、一定範囲に積み上げられたもので、骨の腐蝕に伴って土圧等何らかの外的な影響により、積み上げられていた頭蓋骨が下部の頭蓋骨にくい込むように重ってしまっているという状況のものも含まれている。その他の骨は、頭蓋骨の東横にほぼ方向を同じくして置かれていた。性別・年齢は、男女の壮年～熟年で男性が主体となり、また、乳臼歯が検出されているので小児の埋葬も確実かと思われる。

第Ⅱ期床面において、羨道からは金環１個と刀子１口が出土している。いづれも閉塞石を取り除いた所から出土したものであり、第Ⅰ期床面のものとは確実に区分することができる。

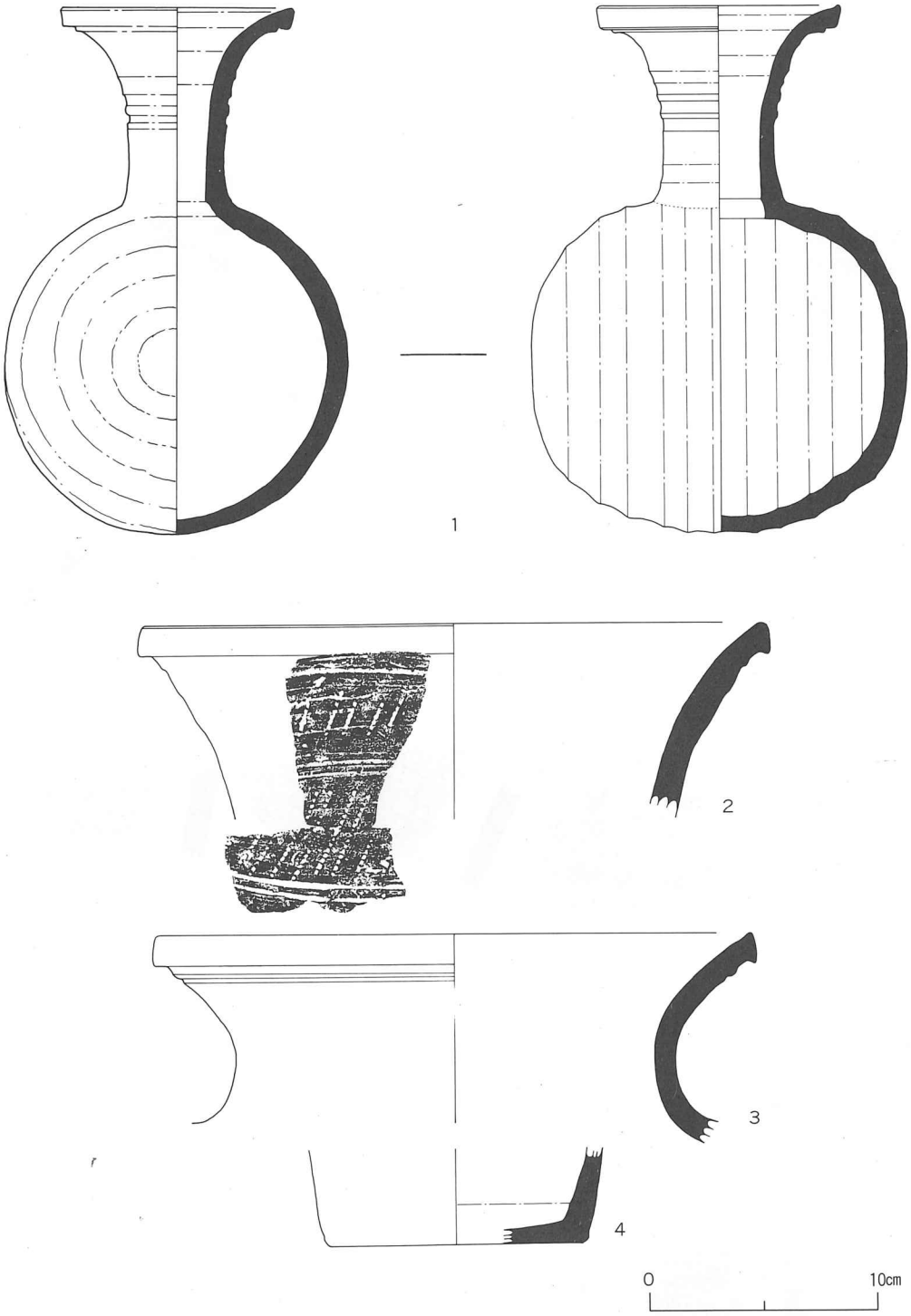
その他に、石室の覆土掘り下げ中に、須恵器の坏片と甕片が僅かに出土しており、これらは墳丘からの流れ込みによる遺物として理解したい。

本古墳における遺物の出土状態は、墳丘と石室からの把握であり、特に玄室の第Ⅰ期床面と第Ⅱ期床面から出土した遺物、さらに、第Ⅱ期床面の第１群と第２群の遺物とが本古墳の性格を考える上で重要な資料になるものと思われる。

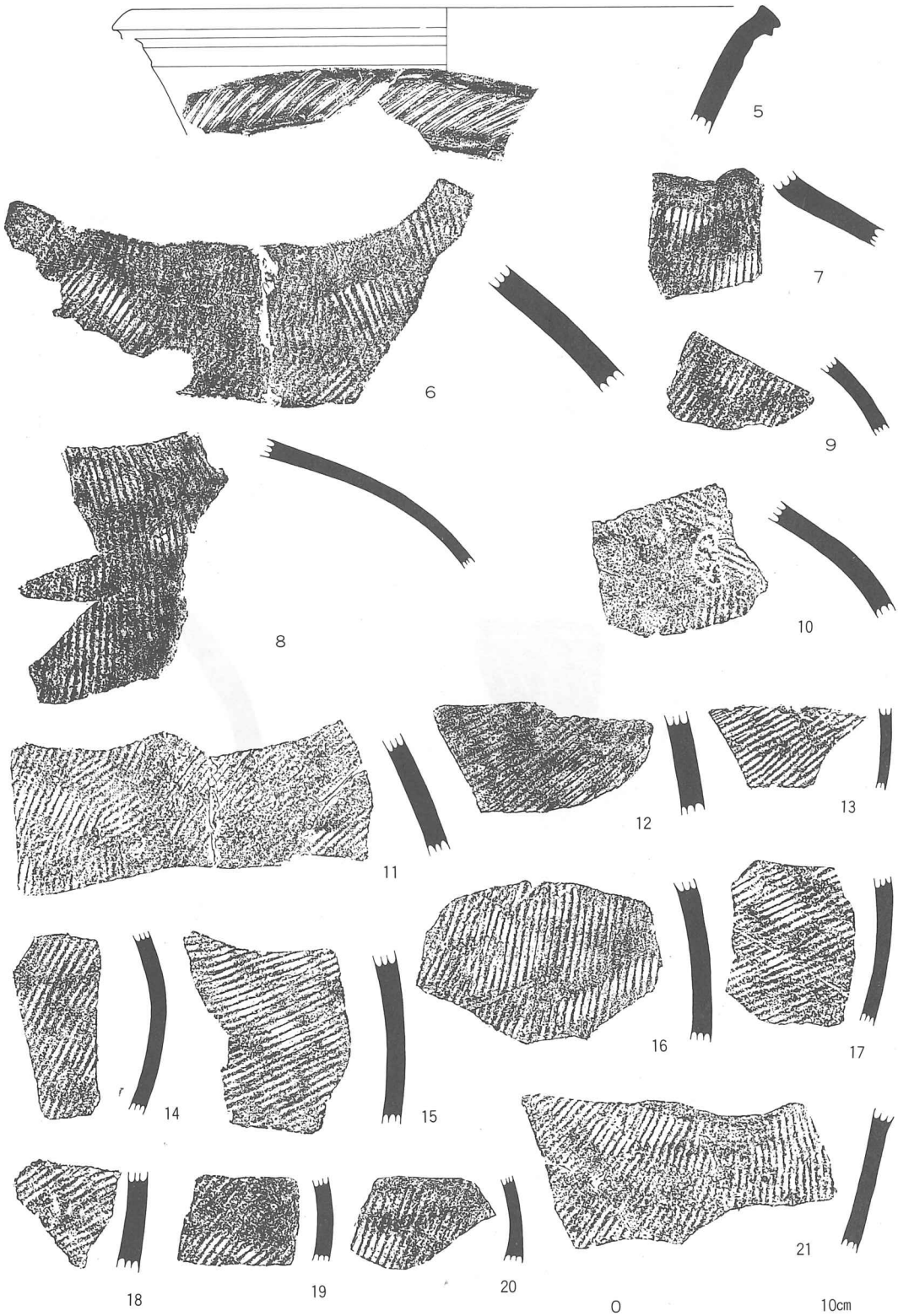
第２節　土　器

フラスコ形長頸壺（第６図１）

フラスコ形長頸壺は２点出土し、そのうちの１点は完形に近いものである。器高は23.1㎝、頸部の長さ9.3㎝、胴部の長さ13.8㎝、口縁部直径10.7㎝頸部直径は中央部で4.8㎝、胴部との接合部で5.8㎝。胴部は、16.8㎝を測り球胴に近い。口縁部はかなりラッパ状に外反し嘴状を呈して



第６図　真光寺第１号古墳出土遺物（１：３）



第７図　真光寺第１号古墳出土遺物（１：３）

いる。焼成段階と考えられるゆがみがみられる。口縁部直下に1本、頸部に2本の比較的深い沈線が廻らされている。胴部に対する頸部の接合は、内面においてみることができる。胴部は、左右の接合以前にロクロによるヘラ削りが丁寧に行われている。全体にロクロ水引き痕が顕著であり、胎土には長石等砂粒が多量に混入している。色調は青灰色で、かなり高温で焼成されたと思われ焼き締めが良い。頸部から胴部にかけて一部自然釉が付着している。

甕形土器（第6図2～4、第7図5～21）

甕形土器は、2が羨道部覆土から出土し、他は墳丘から出土している。2は、口縁部直径27.2cm、器厚1.3cmを測る灰白色の土器で、口縁部は折り返しにより、ほぼ垂直方向を向いている。頸部には櫛歯状工具による突き刺し文が斜めに施文されている。3も2と同様の口縁部形態をもつ短頸口の甕になるものと思われる。5は口唇直下を削ることによって嘴状になっている。頸部には右上から左下にかけてヘラによる浅い施文がある。焼成は良好で、胎土には微妙に砂粒が混じるがかなり精練されており、色調は青色を示す。6～10は肩部の資料で、他は胴部上、下の資料である。6は、乳灰色を示し、その他は青色である。

第3節　武器及び装身具

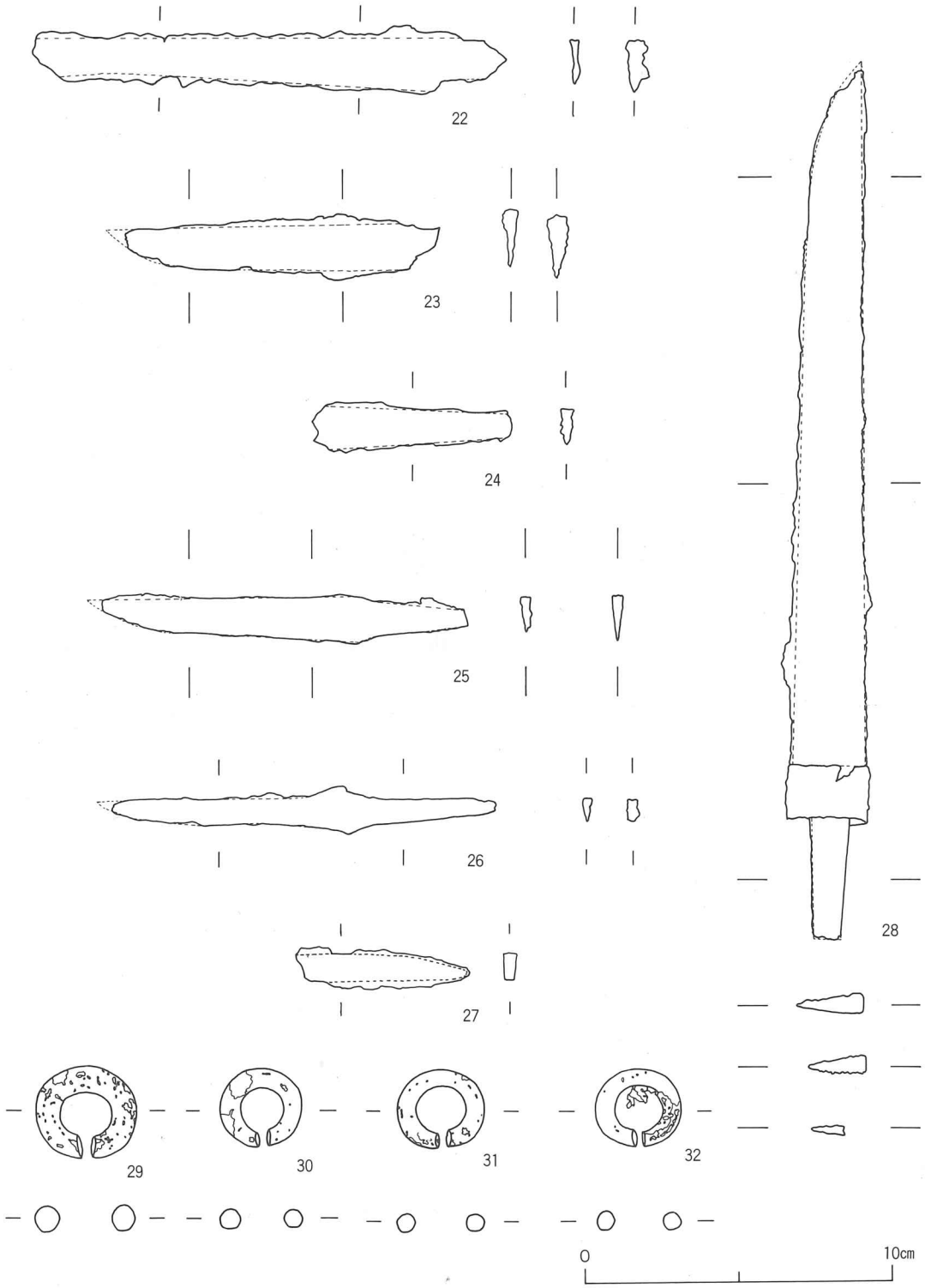
武器類として石室より、直刀1口、刀子6口が出土し、また、装身具として金環3個、銀環1個が出土している。

直刀（第8図28）

直刀は、玄室内の第II期床面の東側壁際で、人骨に埋れるように出土している。切先の一部と茎の一部を欠損しているが、腐食もあまり進んでおらず、かなり原形を止めているものである。残存する全長で28.3cm、刀身23.5cm、茎4.8cmを測り極めて小型の分類に属するものである。棟幅0.6cm、身幅2～2.5cm、茎幅0.3cm、重量132gを測り平棟平造りの直刀である。鍔は存在しなかったが鞘が残っており、鞘の内部にはまだ木質部が付着していた。

刀子（第8図22～27）

22は、切先と茎の一部が欠損し、また刀身も折れていたが、刀身部は接合することができた。現存部で刀身13.5cm、棟幅0.3～0.5cm、身幅1.2～1.7cm、茎2cm、重量42gを測り、茎には紐がまだ巻いた状態で残っていた。刀子の中ではかなり大形の分類に入るものである。23は切先先端部と茎を欠損するもので、刀身9.5cm、棟幅0.4～0.5cm、身幅1.1～1.5cm、重量21gを測り、22に比べ刀身はかなり短いが、身幅がかなり近似し、類似性がある。24は重量11gを測り茎のみで両面のほぼ全体に木質部が残っている。25は切先先端部と茎末端部を欠いているが、ほぼ完形品とみてよい。刀身8.5cm、棟幅0.2～0.3cm、身幅1～1.4cm、茎長3.4cm、重量18gを測る。26は切先の先端部を欠くがほぼ完形品とみてよい。刀身7.6cm、棟幅0.2～0.3cm、身幅0.6～1.0cm、茎は5cm、重量11gを測る。出土した刀子の中では最も細身である。27は、大腿骨の中にあった刀子の



第８図　真光寺第１号古墳出土遺物（１：２）

茎である。表面には海面状組織が付着している。

金環・銀環（第８図29～32）

第８図29～31は金環である。29は直径3.3・3.0cmで環開部に対してやや扁平である。断面は0.7～0.8cmで微妙に楕円気味である。重量は28ｇを測り、銅芯にアマルガム法による金メッキが成され、メッキは100％残っている。30は直径2.2・2.6cmで環開部の左右方向に対してやや扁平であり、断面は0.6cm、重量は15ｇを測る。色調は29の金環と比較すると、僅かに黄味がかっている程度で、むしろ銀環に近い色調を示している。銅芯に銀メッキをしてあり、部分的に剝離しているが保存状態の良いものである。31は直径2.85・2.5cm、断面0.6cmで環開部に対してやや扁平になっている。重量は16ｇを測り、やはり30と同様金色というよりも銀色に黄味がかった色調をしており、銅芯に金メッキをしてある。32は直径2.8・2.6cm、断面0.6cm、重量1.6ｇを測る。銅芯に銀メッキをしてあり、光沢のある白色を示している。銀メッキは、かなり剝落しかかっている。

第４節　真光寺第１号古墳出土人骨

信州大学医学部第二解剖学教室　西　沢　寿　晃

Ⅰ　人骨の出土状態

石室内での人骨は大別して２箇所への集積状態で遺存されていた。やや羨道に近い西側壁際の集積は頭蓋骨が主となったものである。土中より表出された過程で、これらの頭蓋骨は狭い範囲に積み上げられたもので、脳頭蓋の骨表面が互いに外反して接するなど、各骨は異個体のものと見なされ、その個体数もほぼ推定できた。また各頭蓋骨の間隙や下部には肢骨が混在する状態から、各骨が未だ原型を保った時期での石室内への搬入が考えられた。

東側壁際の集積も頭蓋骨に密着した寛骨、これに上腕骨が交叉、下部には複数の個体のものである大腿骨、脛骨などが並列に置かれるなど、１個所への積み重ねられた状態で観察された。

このように各人骨間には個体的な連結性は全たく認められず、また左右対称性の骨も不規則で、いずれも再埋葬のための二次的な移動を推測させるものである。

保存状態はいずれも良好とはいえず、原型を保つものは皆無であったが、残存する部分の骨質は比較的堅緻で、部位の同定もほぼ可能であった。これらから、量的には殆んど見当らなかった微細な部分の骨は、腐蝕により崩壊・消失したと見なすとともに、頭蓋骨や長骨を主とした長大な骨に限定した埋葬の結果と考えられよう。

また、２個所の人骨群はいずれも石室床面よりやや浮上したレベルに位置し、西側壁際のものがより高位に存在した。

Ⅱ　出土人骨所見

西側壁際の人骨群

頭蓋骨

(1) 石室内でのクリーニングの際にはもっとも全体的な形状を残すものであったが、土圧により左右両側から極度に圧縮され、両側頭部分が約6㎝程度の厚さに変形していた。そのため顔面部や頭蓋底は全く欠失する。側頭半面から頭頂部へかけて残存するが、骨表面の腐蝕や剝落が著しい。右側頭部で人字縫合の離開が認められ、わずかながら後頭隆起が存在する。

(2) 土圧により著しく変形し、側面観でも縮少化が目立つが、比較的原型を保つ。主に右頭頂骨、後頭骨の後頭鱗の一部が残る。右乳様突起の先端は欠失するが大である。人字縫合は明瞭に残り癒合していない。夫状縫合の三角部も同様程度で残る。外後頭隆起は著明であり、後頭隆起も弱度ながら存在する。脳頭蓋中に充塡した土中より顎骨の破片と、歯が2本検出された。歯は上顎左第1・2大臼歯で、歯冠のエナメル質部と歯根の一部を残すのみである。第1大臼歯の咬耗は第2に比べてやや進行するが、歯種による相違であろう。咬耗度はBrocaの第1度程度である。う蝕はみられない。性別は不明であるが壮年期のものと推定される。

(3) 接合により脳頭蓋部分（主に左側）が復原できた。厚く頑丈な骨壁を有する。冠状縫合は単純な直線状、他の主縫合も一様に微細な鋸歯状となって残る。ただし内板ではすべての部分で癒着・消失している。頭頂結節は特に認められず、側頭線は弱度に発達している。熟年期のものと推定される。

(4) 脳頭蓋の部分が比較的接合できたものである。右半分が多く残るが、前頭部を大きく欠く。骨壁は厚く頑丈である。矢状縫合の頂部後方と、人字縫合はすべての部分が未癒合であるが、内板では全体的に単純な線状となる。外後頭隆起は通常、後頭隆起が膨隆し顕著に発達する。側頭線の発達もやや強い。個頭骨は右側鼓室部、乳突部、岩様部分を残し、左側岩様部も残る。乳様突起は下方へ長円状に突出している。壮年期の男性骨と推定される。

(5) 脳頭蓋の一部で5×5㎝程の大きさのものと、細片が10数個一括される。人字縫合の一部が離脱して残る。他に側頭骨の外身道周辺から乳突部、錐体の破片残る。乳様突起は欠失している。

(6) 頭頂骨の破片（8×7㎝）と同部の細片が数個残るが、腐蝕が著しく、多くは骨粉状に崩壊している。

(7) 頭頂骨の破片（7×3㎝）と細片、側頭骨の頬骨突起、口蓋骨の一部などが残存する。上顎右第2大臼歯で歯根の下端を欠いたもの、同じく隣接歯の歯冠縁辺のみのものが2個残っている。咬耗が(2)頭蓋骨より進んでいる。

(8) 後頭骨の離脱した人字縫合部分を縁辺とする破片（8.5×6.5㎝）のみである。

(9) 後頭骨の後頭鱗の小部分と、頭蓋底のわずかな部分が散見できるが、土中ですでに崩壊し、採り出し得ない。

なお、(9)頭蓋骨のブロック中に下顎左側の第2乳臼歯とみられるものが1本のみ検出された。歯冠部のエナメル質を浅すものであり、また近接した位置での小児骨の存在は確認できなかった。

上腕骨

(1)　右。骨体の下部約⅓が残存。下関節部分は欠失。

(2)　右。骨体の下部½が残存。骨体横断面は円柱状に近く、やや捻転の傾向がうかがえる。(1)上腕骨に比べて著しく小型できゃしゃである。

(3)　骨頭関節部分の破片。

(4)　骨体の一部分

(5)　下関節滑車部の小部分

以上、右2例の上腕骨は形態の相違が著しく、男女の性差を現わすものであろう。しかし、他の破片からの識別は不可能である。

大腿骨

(1)　右。頸部から骨頭への部分が残存。頸部は短かく太い。骨頭もかなり大型で、男性骨と推定される。

(2)　右。もっとも長大に保存されたもので、骨体下半、後面の一部を欠損するのみである。(1)大腿骨ともに大型、強壮な形態が目立つ。粗線の発達は強度ではないが明瞭で、粗面も強い粗糙性を示す。骨体中央部（推定）横径28.0mm、同矢状径32.0mm、中央断面示数114.3で中型に属する。男性骨。

(3)　左。骨体の上半部約½が残るが、頸部より近位端を欠く。形態は強壮であるが、筋附着面の粗糙性はさほど強度でない。骨体上横径35.0mm、同矢状径25.0mm、同断面示数71.4で超広型に分類される。

(4)　左右不詳。骨体の後面部分が数個あるが同一個体のものである。粗線は中等度、骨質は堅緻である。

脛骨

(1)　左右不詳。骨体の上半部が約15cm程度残存。

(2)　左右不詳。骨体の前稜の一部を含むやや大型の破片と細片とに一括される。

その他の部位

肩甲骨の一部破片、脊椎骨の横突起、右尺骨の橈骨切痕を含む周縁部、肋骨の一部、中手骨の破片等がそれぞれ識別できる程度である。

東側壁際の人骨群

頭蓋骨

頭頂骨、後頭骨の破片、右下顎窩の部分と下顎骨の一部が残るのみであり、同一個体のものと

見なされる。下顎骨は左下顎角から上方の下顎枝、右下顎枝の上方½と下顎体の一部が残る。両側の第３大臼歯(植立状態)と右第２大臼歯、左第１大臼歯が残存する。咬耗は両側第３大臼歯には全たくみられず、他の大臼歯の咬頭には軽度に残る。 Brocaの第１度程度。歯石やう蝕は認められない。

脊椎骨

椎体、椎弓根などの破損したものが10個ほど残り、骨質の性状から同一個体のものであろう。仙骨の左外側部、耳状面を欠くが上部½が残る。岬角は弱度で、凹弯度も強くない。最上位の横線の右側１cmが隆帯状に骨化し、左方は癒着せず、空隙となっている。

肩甲骨

突起の一部などが含まれるが、関節窩が計３個あり、すべて異個体のものである。

上腕骨

(1) 右。骨頭と頸部、骨体の中央部が残る。太く頑丈な形で、小結節も大、結節間溝も深い。三角筋粗面の一部も粗糙度が強いが、骨表面の剝落も著しい。男性骨であろう。

(2) 右。骨体上部が約11cm残存。中程度の大きさといえよう。

(3) 右。骨体上部（約８cm）のみで、(2)上腕骨と同程度の大きさ、(1)に比べて細小である。その他、右の骨体下部が２個残るが、上部と同一のものが不明である。

寛骨

左右の寛骨臼を中心とした部分が残存する。右側は寛骨臼の周縁と坐骨結節の一部、これに同一個体のものとみられる腸骨粗面部分が残る。左側は臼窩から腸骨体、腸骨翼と稜の一部を残す。大坐骨切痕は幅広く、浅い孤状をなし、女性特有の形状を示している。

大腿骨

(1) 右。もっとも保存の良好な骨である。黄褐色を呈し、骨質は堅い。大転子を欠、小転子の頭部欠、骨頭周縁を欠くが、骨体上部⅔が残る。現長約27cm。全体的に細くきゃしゃな形態である。骨体は伸直、筋附着部は中等ないし弱度の粗糙性で、粗線の発達も弱い。骨体上部横径31.0mm、同矢状径20.0mm、同断面示数64.5で超広型。同じく中央部横径26.0mm、同矢状径23.0mm、同断面示数88.5でピラステルの形成はない。女性骨と推定される。

(2) 右。骨体下部約½が残存。遠位関節部は欠く。粗線の発達は中等であるが、腓側唇が著明である。骨体中央部横径27.5mm、同矢状径24.0mm、同断面示数87.3でピラステルの形成はない。

(3) 右。骨体上部約½が残存。粗線はやや強度であるが、筋附着粗面の発達は弱い。

(4)　右。骨体上部約½が残存。粗線はやや強く、骨体上部は一見して扁平性が強い。粗面はほとんど平坦である。

(5)　左。骨体上部½が残存。頸部もほぼ残る。筋附着粗面はわずかに粗糙で、恥骨筋線がやや隆起して発達している。骨体中央部横径28.0㎜、同矢状径21.5㎜、同横断示数76.8を示す。

脛骨

右。骨体中央部が約19㎝残存。頑丈な型である。

他に左右不詳の骨体部分が２例残存するが、１例は(1)と相対するものであり、１例はこれより小型である。

その他の部位

欄骨の近位関節面の一部、腓骨の骨体中央部などが識別される。他に小量の細片が残るが、すべて記載した各骨の破片である。

Ⅲ　要　約

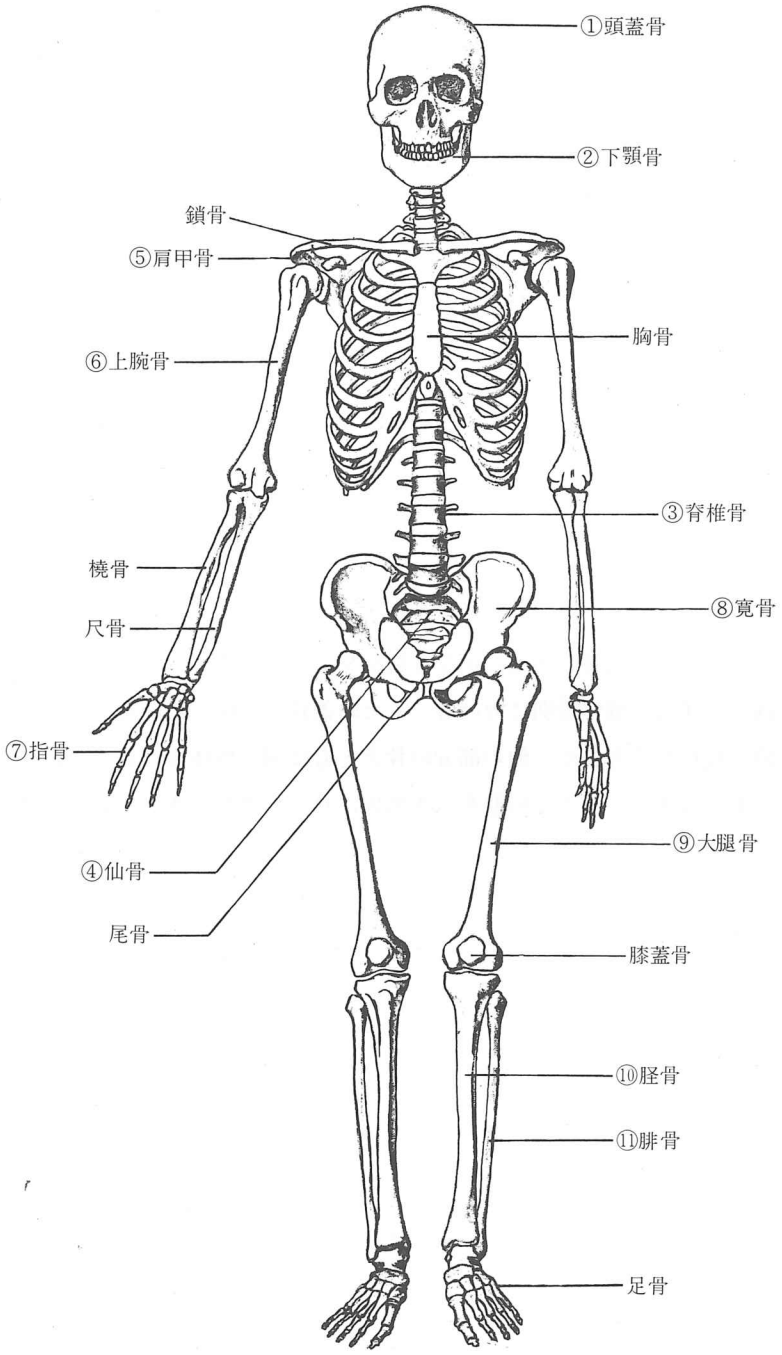
真光寺第１号古墳石室内からの出土人骨は総計10個体と推計された。しかし保存状態はいずれも良好といえず、主として頭蓋骨の出土に伴なう観察や、クリーニングによる各部分の骨の対比の結果であり、細部の詳細は個体識別に欠ける。また頭蓋骨に共伴した肢骨は上腕骨右５例、大腿骨右５例等が最多残存数であるが、他の部分の骨とともに同一個体性は見出し難い。

性別は多くは不明であるが、頑丈な形態を示す個体に対し、著しくきゃしゃで女性人骨の特徴を具えた個体も共伴し、男女人骨の共存は明らかである。また頭蓋骨の縫合の癒着程度や咬耗度にはそれぞれ個体差が認められ、壮年～熟年者の年齢層が主体であるといえよう。例外的に乳臼歯１本の検出は小児骨の存在も推測される。

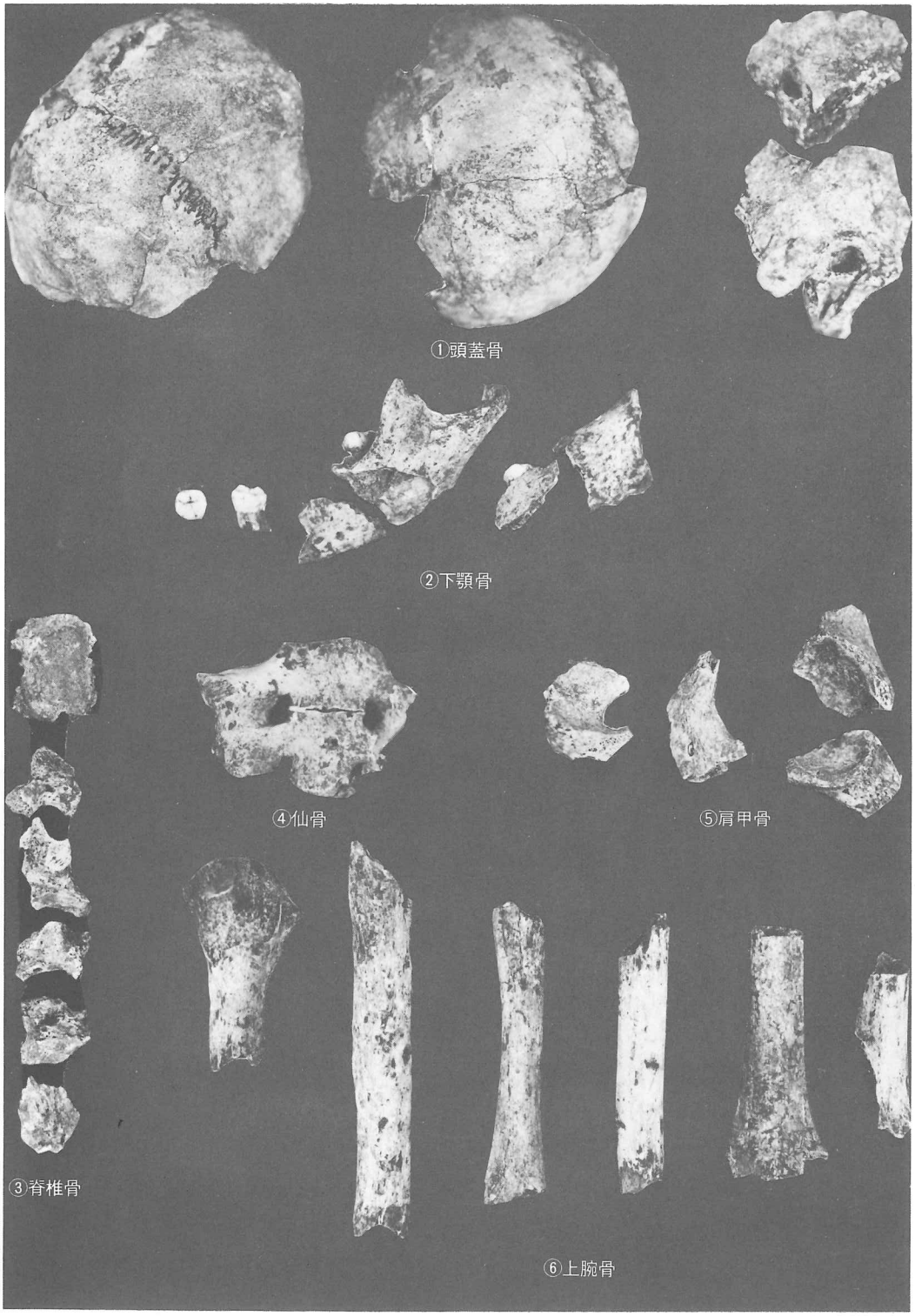
大腿骨の断面示数では、骨体上部において計測可能な２例が超広型のいわゆる扁平性を示すのに対して、中央部の断面示数は１例にピラステルの形成がみられるのみで、他の全例で形成を欠く。これは一般的にいわれる縄文時代人に多見される骨体上部扁平性とピラステルの共存、また中世日本人などでの扁平性が残りピラステルの消失という形質の変移性の一端を示すものともいえよう。

本古墳においては以上の通り、人骨がほぼ２群の集積状態で遺存されていた。西側壁際の１群は頭蓋骨を主にして若干の長骨の併存したのに対して、東側壁際の１群の場合、頭蓋骨は１個のみで、他は体肢骨であり、比較的、全身にわたる部分の骨が含まれていた。２群間の埋葬層位の差異とともに、確認できなかったが主たる被葬者の遺存骨の存在性とも関連して、追葬形式の内容にも多面的な問題が残るものと考えられる。

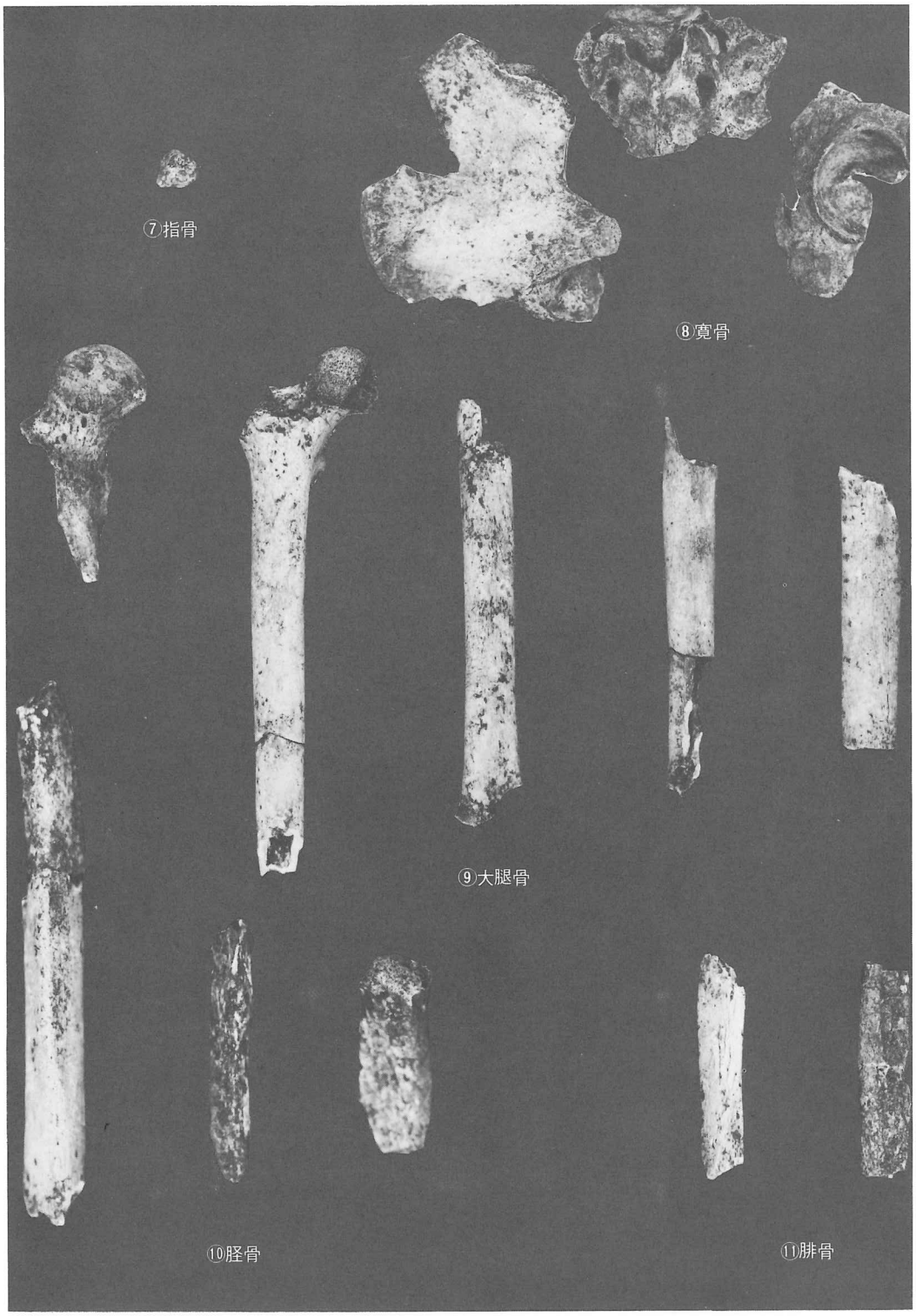
本人骨資料を提示された望月町教育委員会福島邦男氏に厚く御礼申し上げます。



第９図　真光寺第１号古墳出土人骨部位（番号が出土部位）



真光寺第１号古墳出土人骨(1)



真光寺第１号古墳出土人骨(2)

第5章　総　　括

八丁地川左岸の第1．2段丘上に位置している真光寺古墳群は、8基に及んでいる。そのうちの第1号墳は第1段丘と第2段丘の段に近く構築されている。

本、第1号墳は多量の河原の転石を用いて構築されているが、これがいわゆる①積石塚に属するものであるかどうかについて胴張りのプランの石室と関連しまずふれておきたい。次いで本1号古墳からは合計10体の人骨を検出しているが、②第一次埋葬と追葬のあり方についてみておきたい。そして、③特殊な長頸壺であるフラスコ形長頸壺についてふれたいと思う。

①積石塚が半島系帰化人の墳墓であるとの考えは古くから行われて来ていて、今日でもその主流をなしている。(天智天皇5(666)年、百済の男女2,000余人を以て東国に居らしむ、『日本書紀』)の記事は、7世紀中葉という時期のため古くから極めて重視されて来ている。そのため後期古墳の群集化をそのために理解しようという努力が、多年行われて来たと言っても過言でない。信濃国大室古墳群や長原古墳群も、そのために長い研究史の注目を集めて来ているということができる。そのために日本考古学協会は昭和43年秋の松本大会で「積石塚をめぐる諸問題」のシンポジュームを開いたほどである。その主流をなすものは、積石塚帰化人墳墓説であって、対する小意見として石材が得られやすい地域なのであって、特に帰化人の墳墓と結びつけない方がよいのではないかとの、石材利用説もある。しかし、そういうなかでも合掌形石室をもつ古墳を、特に半島起原と関連させる考えもある。

しかし、主たる意見は、農業生産の不適地域をあげ、馬匹生産の牧場経営を生業とする半島系集団による積石塚、合掌形石室築造の可能性として理解されているのである。

そうしたなかへ更に横穴式石室の平面プランが胴張り状であるものをもって、百済の塼槨構築の技術と関連させて、百済系帰化人の墳墓とする説も行われている。同種の石室をもつものは県下に100余ほどあり、それも北信に集中しているようで、いわゆる積石塚に多いとの指摘が行われている。御牧との関連でも指摘されていて、その点においても半島系帰化人との関連が言及されている。

真光寺第1号古墳はこうした認識に、有力な資料を提供することになった、と言うことができるかに見える。河床礫による胴張りプランの石室、そして河床礫による部厚い墳丘の被覆、望月牧の存在と三拍子がそろったのである。真光寺古墳群8基はことごとく河床礫によるヤックラ状を呈していて、ことごとくが積石塚とみられる様相を呈しているのである。

半島系の積石塚は本来、モンゴル→東北南部→高句麗東部→新羅に至ったものと言われているが、百済にも古い時期に高句麗からの影響としてもたらされているようである。これらはまったくの積石塚で木槨をもつものを基本としているようである。しかし内部構造はともかくとして、

善光寺周縁部に行われている。本真光寺第１号古墳と同様な、見かけ状は積石塚にみえるという土砂を墳丘の原形に用い、ひかえ積みをしていく構築方法の墳丘を、本当に積石塚と言えるのであろうか。これではいわゆる葺石の行われている古墳はすべて積石塚という事になってはしまわないであろうか。保存のいい古墳の大部分は、こうした所見を認められ、築造当時はまさに積石塚状を呈していたと考えられるふしがある。これらをすべておそらくどの研究者も積石塚と言わない事は自明であり、土墳の葺石と考えられているのである。

積石塚を帰化人起源を説くとき、ほとんど例外なく８世紀末の『日本後紀』による高句麗系帰化人と関連させようとする。積石塚＋騎馬（馬匹）生産の流れがそれで説得力があるのか、百済の農耕民族と馬匹生産が説得力があるのか、いずれとせよ不会同着のおもむきがある。胴張プランの石室との関連も、合掌形石室との関連も、前者は明らかにならない部分が多いのでひとまずおくとして、後者は百済での発見例は４例でいずれも土墳、善光寺平周縁部29例積石塚と言われているものの方が多いというのは、いかがなものであろうか。

また、百済人2,000人東国へと同時性を与えて考えるむきも、信濃100余基をどのように位置づけるのであろうか。横穴式石室の性格上家族墓と考えると、仮に半数が信濃に散ったとして200家族、２家族に一基の高塚古墳を築造するという単純な社会構造であったのであろうか。しかも、７世紀後半に東国において同様な現象を見ることができるのであろうか。今後の研究課題とされるものはきわめて大きいものがある。

高位牧、大室牧を理解するために古墳群を用い、古墳群を理解するために高位牧、大室牧に先行する馬匹生産や帰化人移植の考えを援用するところに、基本的な問題が伏在するのではないだろうか。その基底をなすものに農業生産力の低位性を前提としているが、それでいいのであろうか。

本来、善光寺平周辺部の大古墳群は、弥生時代から続く農業生産力の高さの中からもたらされたものであり、その築造方法は石材利用的であって、北東部の火成岩地帯に、いわゆる積石塚と呼ばれるものが集中し、西部三紀層地帯ではほとんどみられないのは自ら答えとなっているように思われる。東国最大の御牧である望月牧周辺では、やはり古墳の数は農業生産力に比例していてその数は立科・望月・浅科・北御牧合わせても80基にみたない。しかし、この80基をささえた農業生産力は、後期古墳時代６・７世紀までに次第に高まって来て、やがて大御牧望月牧をささえる農業生産力に成長して行ったとみるべきである。農業生産力の低位性をもって馬匹生産存在の理由をすることは大きな過ちをおかすこととなるように思うのである。

真光寺古墳群も八丁地川第１・２段丘上に位置しているという立地を最大限に活用していることの結果としての墳丘構造であるということができる。

②東壁側に２体、西壁側に８体の人骨は注目させられる。いずれもすでに言及されているように第１次埋葬と追葬とに理解される。しかし、第１次埋葬が同時２体ということはあり得ないと考えるとこの２体は第１次埋葬時の床面を使用しての追葬が一回行われていることを物語るかもしれない。しかし次の追葬時に床面の修復が行われた際人骨がとり上げられ、東壁側に寄せられ

たとみるのが自然である。しかし追葬時8体はどのように理解するのであろうか。出土状況及び人骨の検証により、幼児をふくむ成人から熟年男女となっていて、再葬による人骨のみの集積追葬の感がある。いわゆる白骨化するまで玄室内には入っていないと指摘されているのは、今後こうした事例の増加によってのみ理解できるところである。

③須恵器のフラスコ形長頸壺は、とくに三河・遠江地方の後期古墳で集中して検出される特徴ある器体である。6世紀末から7世紀初頭にかけて新しく東海地方で発現し、関東から東北にかけてひろがったものとみられている。まれに西日本にも流入しているとのことであるが、横瓶や提瓶と体部のつくりや頸部の接合の仕方は同様で、体部はほぼ球形であり、西日本に核をもつ須恵器群の中で異色なあり方をしているものである。7世紀末で消滅するという考えと、8世紀の高台付長頸壺へと展開するとの考えとがあり明確でない。しかし、その発現と東国への分布は何を意味しているであろうか。6世紀末から7世紀初頭そして7世紀末までの中にどんな歴史的内容を表現しているのであろうか。中部高地での検出例は管見にして知らないが、真光寺第1号墳例は口縁部凸帯のつくり出し方からして7世紀後半のものであるが、東海型須恵器の検出がどのようなものと理解できるのか今後の課題である。半島系帰化人説の波の中で、こうしたあり方をどのように理解し、位置づけるべきであるのか大方の御教示を受けたいところである。

真光寺第1号墳の調査は、実に様々な研究課題を提起している。おそらくは望月牧揺藍期を代表するものとして、今後の研究に大きく役立つものと期待される。問題点にのみふれて総括としたい。

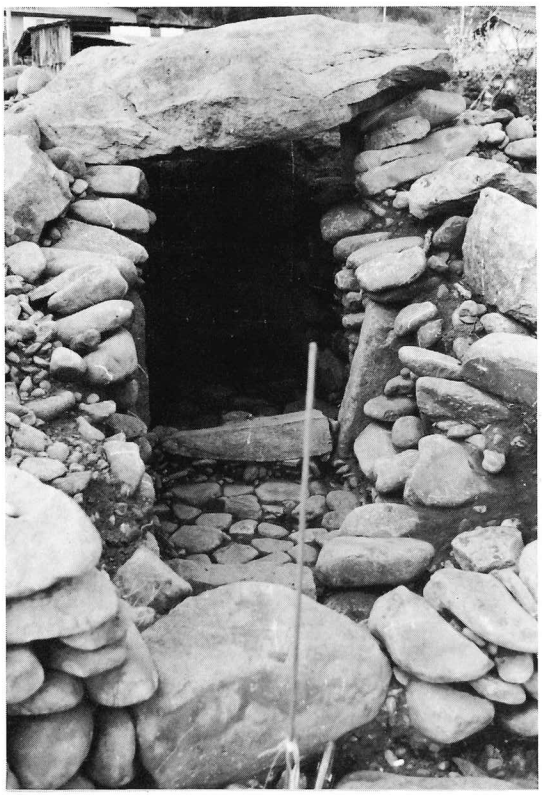
（森　嶋）

図　　版

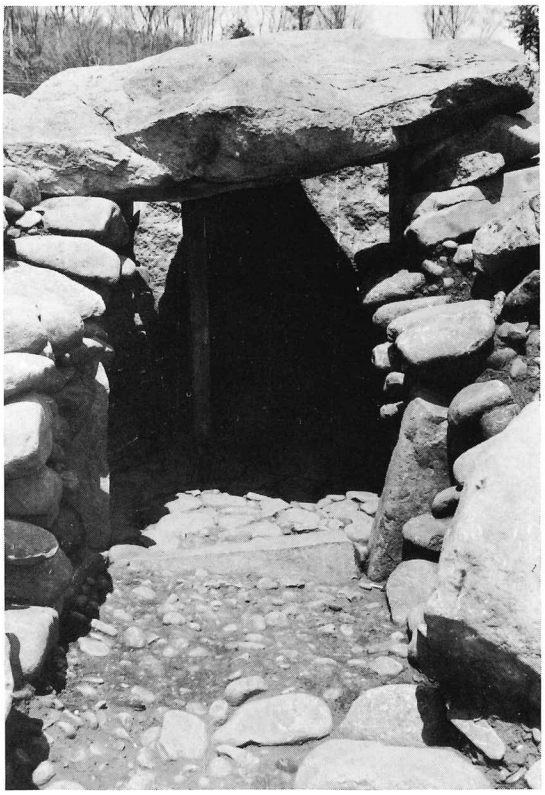
1．真光寺第１号古墳墳丘全景

2．真光寺第１号古墳墳丘、石室、前庭部全景

3．真光寺第１号古墳墳丘石室前庭部全景（落下天井石を取り除く）



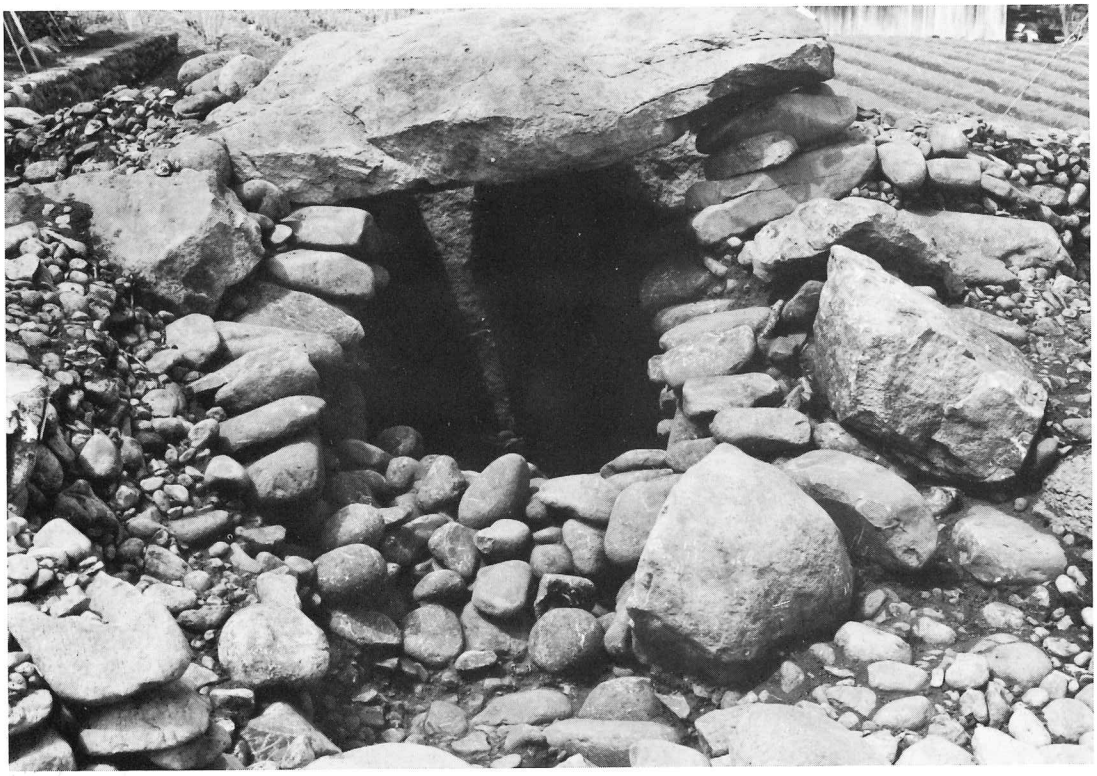
4．第Ⅰ期床面



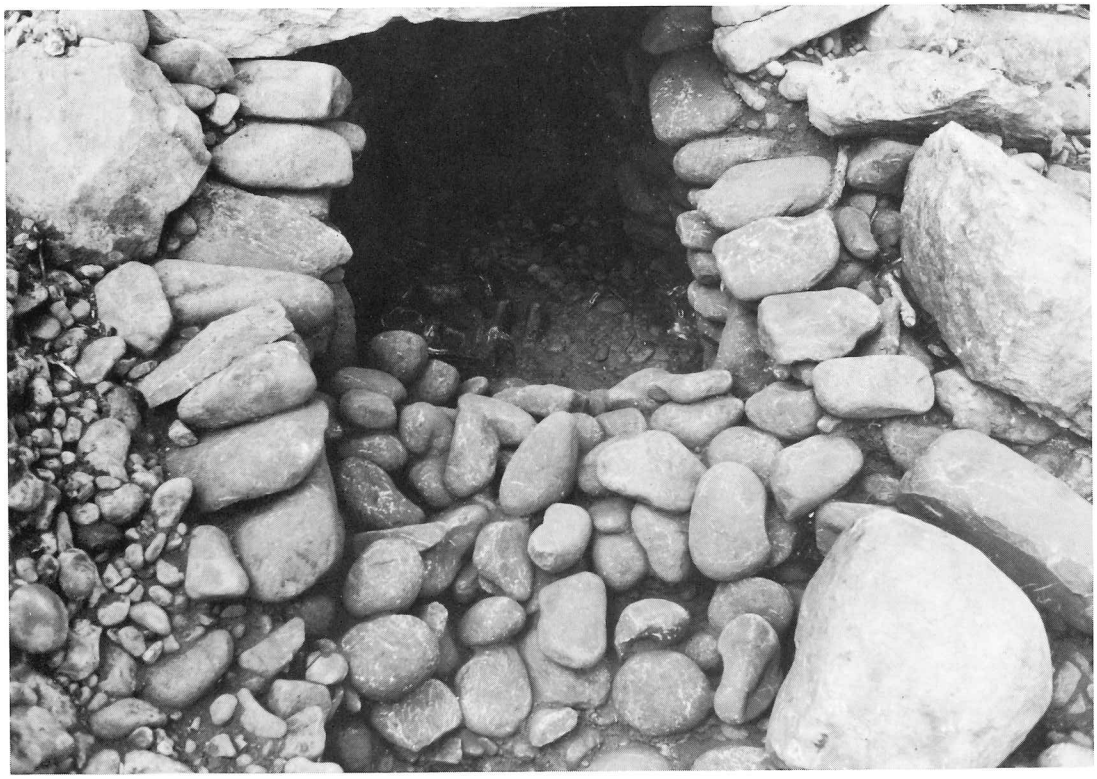
5．第Ⅱ期床面

6．第Ⅰ期石室の様子（框石は第Ⅱ期のもの）

7．第Ⅱ期玄室内の様子



8．閉塞石の様子



9．閉塞石の様子

10. 墳丘西部C —D 断面

11. 墳丘東部C —D 断面

12. 墳丘北部A －B 断面（奥壁裏側）

13. 玄室内人骨出土状態（右側が第１群、左側が第２群）

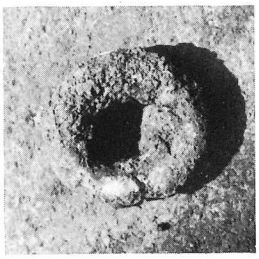
14. 第1群人骨出土状態

15. 第2群人骨出土状態

16. 真光寺第1号古墳出土土器

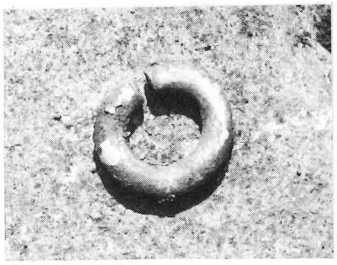
17. 直刀出土状態

18. 刀子出土状態



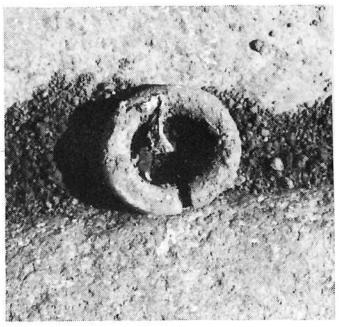
21. 金環出土状態

19. 刀子出土状態



22. 金環出土状態

20. 刀子出土状態



23. 銀環出土状態

24. 真光寺第１号古墳出土武器及び装飾品

25. 地元の方々の見学会風景

26. 協和小学校生徒さんの現地学習

望月町文化財調査報告書　第９集
真光寺第１号古墳
1983年３月20日
発行　望月町教育委員会
印刷　ほおずき書籍株式会社